郷土に生きる教育家群像㊳新潟県

視覚障害者に教育の光を

盲学校設立の功績者

大森隆硕（りゅうせき）

隆硕、医学に志す

大森隆硕は戊辰戦争の際、官軍の軍医として、野戦病院で働いていた。傷ついた兵士が次々に病院へ運び込まれ、隆硕は不眠不休で患者の治療に当たっていたが、そこで目を見張る場面に出会った。

このとき、医術の進んだヨーロッパから軍医として隆硕等と一緒に傷病兵の治療を精力的に行っていたのが、イギリス人の医師ウィリアム・ウィルスである。彼はこの戦争の間に、上下肢切断などの大手術を一六回も行ったという。

当時の日本の医術しか知らなかった隆硕にとって、ウィルスの近代的な手術の技術は驚異であった。隆硕は、ウィルスの高度な外科医としての技術に深い感銘を受け、戊辰戦争が終わるとすぐに、藩費留学生として大学南校（現在の東京大学医学部）に入学をして、近代医学を学ぶことになった。隆硕二四歳のことである。

当時の高田（現新潟県上越市）には、目を患ったり、目の見えない人が大変に多かった。冬になると雪で家の中で生活することの多い高田では、囲炉裏（いろり）の煙で目を痛めたり、食生活の影響で、栄養障害を起こし、角膜を痛めて失明をする人が多かった。

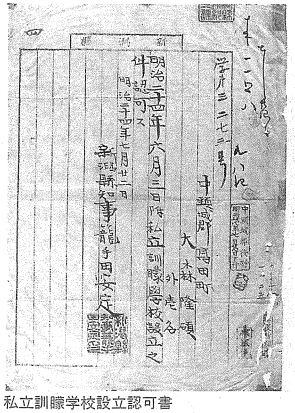
江戸時代には視覚障害者の保護政策として、「当道座（とうどうざ）」と呼ばれる、幕府から自治権を与えられた組織があった。しかしその「当道座」も明治維新後に廃止されてしまい、視覚障害者の多くはたちまち生活に窮してしまった。

隆硕は一八四六年五月二二日、高田で、高田藩眼科医・大森隆庵の長男として生まれた。五歳で城下の漢学塾に入門し、七歳のとき親子ほど年上の塾生を前に論語の講義をしたという。

隆硕は、眼科医である父の跡を継いで、大学南校で眼科を学び、高田へ帰ってから新須賀町（現上越市仲町二丁目）に開業した。

「先生、見料は後で払いますから、子どもの目を見てやってください。」

「おやおや、どうしたね。ずいぶん充血しているが、これはよく目を洗って清潔にしておかないと、目を悪くしてしまうよ。」



私立訓瞽学校設立認可書

隆硕は、このように貧しい患者に対してもやさしく接し、金銭に無頓着で、治療費もとらないような医者であった。

盲学校設立の夢

「杉本さん、私は本当に失明する覚悟をしましたよ。」

野戦病院で一緒の仕事をして以来、ずっと親しくつき合ってきた杉本直方に対してしみじみと隆硕は語った。

眼科医として開業してちょうど一〇年目に、隆硕は目を患い、ほとんど失明状態になってしまった。隆硕はショックだった。今まで考えてみればずいぶん多くの患者に失明宣言をしてきた。そしてそれは医者としての責務であると割り切って考えてきた。しかし、いざ自分が失明状態になってみると、目が不自由であることがいかに大変なことであるのか、いやそれ以上に、もうこれ以上視力が回復しないのではないかという不安感は大変なものであった。

「杉本さん、私は眼科医でありながら、これまで目の見えない人たちの苦しみも、悩みも本気になって考えてはこなかったように思う。」

「大森さん、あなたがいままでやってきた仕事は、目の見えない人たちにとって大きな救いになっているじゃないですか。」

「いや、杉本さん。私は自分の目が見えなくなってしまったらと考えたときに、真っ先に思ったことは本が読めなくなるということでした。私から本を奪うということは、医者をあきらめろと言っているようなものです。しかし、考えてみたら、目の見えない人には学問をする場所がありません。職に就くことすらなかなかままなりません。私は今まで眼科医として病人の目を治すことは一生懸命やってきたつもりですが、目の見えない人の生き方を支えるということではまだまだでした。」

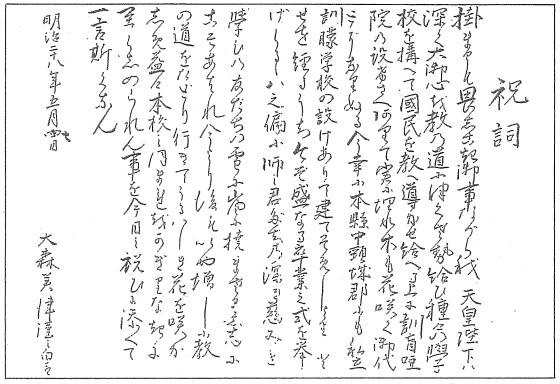
隆碩はここまで言うと、目を閉じた。そして、穏やかな話し方の中に、強い意志を込めて、友人の杉本に、彼の決意を話した。

「杉本さん、私は決意しました。教育です。目の見えない人が真に独立して生きていくためにこそ、教育が必要なのです。そのためには、目の見えない人の学べる学校をつくらねばなりません。私は自分で目を患ってみて、初めてこのことに気がつきました。」

「大森さん、よくぞそこまで考えた。」

杉本直方は、感動して隆碩の手を取った。

「目の見えない人のための学校をつくるということは大変な事業だ。しかし、これこそが目の見えない人に光を与えることになる。お互いに力を合わせて、夢の実現にがんばろうじゃないか。」



祝詞

第１回卒業式祝詞

夢の実現

明治二〇年、隆碩の意気に感動した同志二九人が集まり、盲学校をつくるための組織として、『訓盲談話会』を発足させた。その半数は視覚障害者であった。二一年には資金や指導者のめどもつき、光樹寺（現上越市寺町二）というお寺の庫裏を借りて、授業を開始するまでにこぎつけた。集まった生徒は一〇名足らずであったが、隆碩等は人数はわずかでも、学校で学びたいという視覚障害者がいることを大いに喜んだ。

「大森さん、弱ったことになりましたよ。」

杉本直方は、一通の封筒を持って隆碩の病院を訪れた。

「また、だめでしたか。」

隆碩はがっくりと肩を落とした。

「そうなんです。今度は施設が不備だというんですよ。」

これで三度目の却下である。学校として正式に運営していくためには、県知事の認可が必要である。隆碩は、明治二二年一〇月、設立願書を県に提出したが、組織不完全の理由で却下されてしまったのである。

「杉本さん、でも私はくじけません。東京へ行ってきます。東京の学校を視察して、今度は県も感心するようなすばらしい学校をつくりましょう。」

隆碩は、上越の教員の研究団体であった上越教育会に依頼して、視覚障害者教育の指導法を研究するために、教育会から六人の委員を選出してもらった。六人の委員は毎週木曜日に交代で目の見えない子どもたちの指導法を研究するために派遣された。

とるものもとりずに上京した隆碩は、当時東京ですでに学校として認可されていた「東京盲唖学校」を視察して、学校の組織や教育内容について詳しく指導を受けた。

これらの成果を基に、学科・課程を普通科・技芸科の二課程とし、修業年限を四年とした。そのほか教科や授業時数なども明確に定め、明治二四年、四度目の学校設立願書を県に提出した。

「世の中の人たちは、視覚障害者にあまり関心を寄せないことが多いようである。そのためせっかく優れた能力を持った人であっても、適切な教育の場がないために、その能力を発揮することができないこともある。教育によって視覚障害者の能力を伸ばしてやることは決して困難なことではない。ここに私たちは学校を設立し、視覚障害のある子どもに少しでも天の恩恵を分け与えたいと思う。」

隆碩が県に願書を提出した気持ちの一端を示すものである。視覚障害者に対する隆碩の深い理解と愛情が伝わってくる。

生徒たちにかこまれて（２列目右から２人目が隆碩）

同じ年の七月二二日、ついに隆碩は「私立訓瞽学校設立之件認可ス」という県知事の認可書を手にした。杉本直方に盲学校設立の夢を語ってから、すでに五年が過ぎていた。こうして全国でも早い時期に、雪深い新潟県上越・高田の地に盲学校が誕生したのである。

隆碩の教育に対する情熱に理解を示した人々の寄付で、学校の設備は一応整ったものの、学校の財政は窮乏し、教員の給料も満足に支払えない状況が続いた。隆碩は不眠不休で寄付金集めに奔走したり、演説会を開いて、義援金を募ったりした。また、隆碩の取組みに感動した高田のある牧師は、教団から支給される給与の中から毎月六円の寄付を送り続けたという話も伝わっている。

隆碩は、明治二八年五月の、第一回卒業式には病気のため出席することができなかった。隆碩五〇歳のことである。

中風を患った隆碩は、明治三三年、校長職を親友の杉本直方に譲り、東京で療養に当たった。しかし、明治三六年一〇月五日、波乱に富んだ五七年の生涯を閉じた。

【参考文献】
市川信夫著『大森隆碩』（「究」新潟日報事業社から）
新潟県社会科教育研究会著『新潟県教育史夜話』

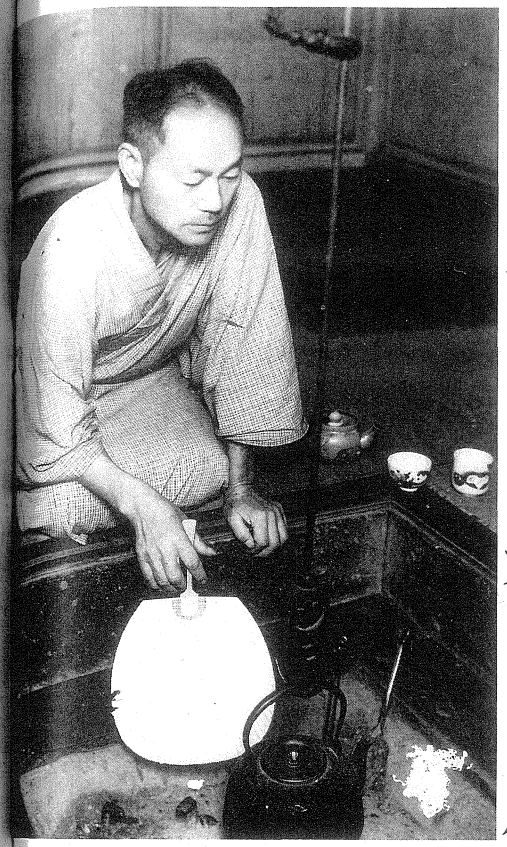
（三和村立三和中学校教頭　秋山正道）

郷土に生きる教育家群像㉙富山県

『刀利の聖人』よ、永遠に！

へき地の教育に生涯をかけて

山崎兵蔵



富山県の西端、福光町を流れる小矢部川の上流に、昭和四一年、刀利ダムが完成した。同時に一つの村が廃村になり、分校とともに永遠に湖底に沈むことになった。戸数二七戸の刀利村と太美山小学校刀利分校である。

『刀利の聖人』とあがめられた山崎兵蔵の銅像が、湖岸の木立の中に、湖底の分校をじっと見つめるように立っている。

「（前略）、明治三十四年五月に刀利分校に教師として立つ。昭和三十一年三月、退職するまで五十五年間、学校を我が家となし、児童を我が子となし、村人を家族となし、その尊い生涯を真実一路、刀利谷の教育に生きぬいた。……先生の恩愛を受けたもの、この寿像を建て、永くその温容を仰がんとす。」

昭和三十六年　　村田豊二　記

当時、県の視学官を勤めていた村田氏は、何度も刀利分校を視察し、山崎兵蔵に深く傾倒し、銅像の建立にあたり、台座の裏に前記のような碑文を刻んだ。

『かたい兵ま』の少年時代

「兵まや、待っておった。今日も米かちや」。

兵蔵は幼少のころから働くことが好きで、学校から帰るとすぐに母の手伝いをした。兵蔵は明治二〇年一月一一日、綱掛村（現在の福光町綱掛）で山崎善蔵の二男として生まれた。兵蔵には六人の兄弟があったが、弟三人と妹一人は早くから京都方面に働きに出ており、兄と兵蔵は一家の大切な働き手であった。

父の善蔵は、子どものわがままは絶対に許さない厳格な性格で、優しい母とこの父の威厳があって『かたい兵ま』が育ち、後年の『刀利の聖人』の人となりが培われたのである。

尋常小学校三・四年のときの担任は影近清毅氏であった。彼は、独学で早稲田大学を終え、鉄道省の参事官にまで進んだ立志伝中の人物である。影近氏は、兵蔵を将来ある子とにらみ、特別に指導を加えた。

小学校を卒業すると、影近氏の勧めで福光の高等小学校に入学した。担任の吉波彦作氏も尋常三年を終えただけで独力で検定を受け、中学校長にまでなった人物である。彼の猛烈な勉強ぶりも兵蔵に大きな感化を与え、四年間、一度も休むことなく約一〇㎞の道のりを通いとおした。

湖底に眠る刀利分校をじっと見つめる山崎兵蔵

一五歳の少年教師の誕生

「ひとつ頼みがあってきたんだがね。実は、今度刀利に学校ができたんでね。是非よい先生が一人ほしい。兵蔵さん、あんた引き受けてくれないかね」。

高等小学校を卒業したばかりの兵蔵は、五月も近いある日、突然村長の訪問を受けた。

太美山村刀利は、明治二五年以来、へき地のため、教育免除地となっていた。愛郷心に燃える影近校長は、教育免除地は村や郡の恥辱であると考え、村長や郡長、郡会議員を説いてまわり、ついに教育免除地が解かれ、四月から分校が開設されることになったのである。その教員を求めるにあたり、影近校長は、『かたい兵ま』に白羽の矢を立て、推薦をしていた。

「もったいない話や。お前が先生になってくれたら、親の本望や」。

あまりにも突然のことで返事に迷っていた兵蔵は、母のこの一言によって意を決した。

五月一日、開校式で兵蔵は、あまり年の違わない一一名の児童を前に新任のあいさつをした。

「私は今日から刀利の先生です。皆さんもいっしょに、よく学び、よく遊び、よく働いてください」。

四月に他校へ転任していた影近校長もわざわざ駆けつけ、兵蔵を励ました。

「免除地となる前におれがここへきて代用教員をし始めたのは明治二一年。そのときは、おれも君のようにまだ少年だった。頼むぞ、兵蔵君、おれの志を継いで、是非この学校を

立て直してくれ。刀利だって住めば都さ」。
その一言一言が兵蔵の胸に刻みこまれ、責任の重大さをひしひしと感じるのであった。

刀利に捧げた教育愛

新しく開校されたとはいえ、学校とは名ばかりで、壁は崩れ落ち、障子は破れ、隅々はくもの巣だらけというありさまであった。事務室はもちろん、教室にも机やいす、黒板も何もなかった。次の日から学校づくりが始まった。まず、板を三枚合わせ、裏に桟を打ち、表に墨を塗りつけて、たちまち黒板が完成した。家から板切れを持ってこさせ、器用にそれらを利用して真新しい机やいすも作られた。障子も張り替えられ、屋根の雨漏りも修理され、学校の体裁もしだいに整えられていった。

黒板を取り付けようとして頭をぶっつけ、「黒板になぐられた」とおどけるユーモラスなしぐさや、楽しそうに働く若い先生の姿に、児童たちもたちまち打ち解け、一五歳の少年先生の教育も、少しづつ、そして着実に浸透し始めていった。

山の学校は、学用品の調達が思うようにいかない。そこで、必要なものは注文を聞いておき、月に二、三回は福光へ買い出しに出かけた。困ったのは教科書関係で、福光では手に入らなかったので、隣の金沢市まで出かけなければならなかった。わらじがけに大きな風呂敷包みを背負って山越えをすると、帰りは真夜中になることもあった。しかし、真新しい学用品や教科書などを受け取る児童たちのうれしそうな顔を見ると、疲れなどはどこかへ吹っ飛んでしまう兵蔵であった。

児童たちの教材にと買い求めた品々の前で

大正六年の真夏、兵蔵は、大きな荷物を背負って刀利への山道を登っていた。音楽好きの兵蔵は、娯楽的施設のない山の学校に、情操教育の一環としても音楽は重要であると考え、オルガンを購入したのである。当時の月給一三円に対して一八円の代金は相当な出費であったが、毎日、オルガンを囲んで児童たちと歌う楽しさを思うと、身の苦労など全く意に介するどころではなかった。

このころ、兵蔵は、村の青年たちを集めて夜学を開いていた。冬のある夜、夜学の生徒に蓄音器の話をした。すると、生徒の一人が、

「ボッカでもうけて、それを買おう」

と提案した。たちまちみんな賛同し、早速次の日からボッカに精を出した。重い荷物を背負って運送するボッカは決して楽な仕事ではなかったが、だれ一人としてぐちをこぼすものはなかった。雪解けを待って金沢市へ出かけたが、最新式の蓄音器は二六円と驚くほど高価で、青年たちの手の届くものではなかった。がっかりする青年たちの前で、兵蔵は足りない分自腹を切ってそれを買い求めた。当時、区域内に蓄音器のある学校など一つもなく、

「刀利の方が文化が進んでいる」

と、ほかからうらやましがられたほどであった。

また、給料の倍以上もする騰写版を購入し、児童たちの教材はもちろん、学校新聞を編集・印刷して村の家々に配った。この学校新聞は、村の文化の向上に大いに貢献し、昭和一三年、ようやくこの地に日刊新聞が普及するまで続いた。

兵蔵は、こうした精力的な活動により多忙をきわめ、生家からの通勤をやめて、学校の宿直室に寝泊まりするようになった。夜ともなるとだれかれなく集まってきて、囲炉裏(いろり)のまわりで談議に花が咲いた。どんなに多忙でも、常に話の中に入り、若い人たちには青年団や婦人会の結成を勧め、自ら団長となって指導したり、老人には昔話や仏教の話をしたりした。また、村人に貯金を奨励したり、製炭や養蚕などの産業の開発をすすめたり、道路の改修に力を注いだり、全村的な教育に打ち込んだ。村人たちも、生まれた赤ん坊の名付け親になってもらったり、家庭の問題を相談したりして、だれ言うともなく「囲炉裏先生」として慕われるようになった。兵蔵も、村全体の生活や文化が向上することが本当の教育であると考え、そのとおりに実践した。

勤続50周年記念式で児童たちの作品の前にたたずむ

刀利での勤続五〇年を迎えて

昭和二六年五月、赴任当時一五歳の山崎少年の教育は、満五〇年を迎えた。地元刀利はもちろん、太美山村挙げての記念式と祝賀行事が盛大に催された。参列者の中でもひときわ感激的に村人の代表が言葉を述べた。

「山崎先生は、年少の身を山深いこの刀利に運んでくださいました。……その尊い一生をとうとう刀利の我々のために賜わりました。小さなランプをつけていた昔から、ラジオを聴くに至りました。今日までの刀利の進歩発達は、一つとして先生のお力によらないものはありません。」

この年の九月、当時の天野文部大臣が来県され、教育功労者として大臣の賞詞を賜った。

「教育は人間の真実心を以って人間の真実心を育てる最も真実なる作用である。それ故、教育はその本質に於いて深く永遠性を宿している。かかる教育本質を偉大に発揮されたのが、我が山崎先生である。」

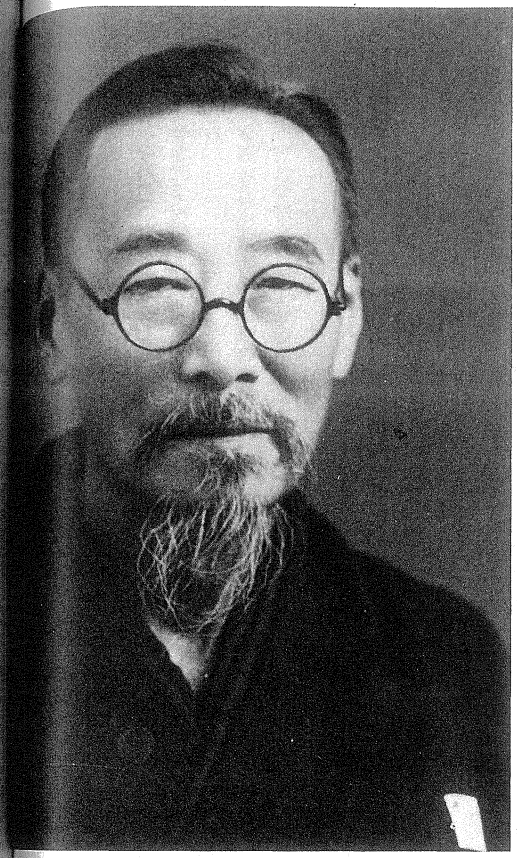
午後からの文部大臣の講演の一節である。

【参考文献】『一茎百華』村田豊二著 学芸図書発行
『立山を仰いで』富山県教育記念館発行

（東砺波郡利賀村立利賀小学校教諭　北田耕三）

郷土に生きる教育家群像㊱石川県

異色の教育功労者
陰徳の人
木谷吉次郎



学問の道を断念

教壇には立たなかったが、育英にかけた情熱とその人間性において、教育者以上に我が国の教育の発展に寄与した人物として木谷吉次郎をあげねばなるまい。

吉次郎は安政五年（一八五八）石川郡粟崎村（現金沢市粟崎町）に生まれた。本家は、藩政期を通じて豪商の名をほしいままにした加賀藩御用商人木谷（木屋）藤右衛門家である。

分家筋に当たるとはいえ、吉次郎は名門の嫡男として生まれ、なに不自由のない幼年期を過ごした。

やがて明治維新を迎え、学制発布により村内に設立された公立小学校に入学した吉次郎は、漢学者瀬尾健造の感化を受け、深い儒教的な倫理観を身につける。小学校を卒業した後も瀬尾に傾注した吉次郎は、師範学校に転任した彼に一年間私淑するほど向学心に燃えた青年に成長する。

吉次郎の学才に注目した瀬尾は、進学を進め、吉次郎自身も学問への道に進むことを希望したが、父親の強い反対で進学を断念、しばらく小学校の雑務係をしていた。

明治維新の激動の中で木谷一門も、鉱山業や金融業など近代的な実業の分野への転身を図っていたが、明治一四年（一八八一）からの松方正義のデフレ政策による不況で、さしもの木谷一門も財政的窮地に追い込まれていた。

二一歳で結婚していた吉次郎が家督を二六歳で継いだのは、そのような状況下の明治一六年（一八八三）であった。

一家を支える重責を負った吉次郎は、実業の道に乗り出すに当たり一つの強い決意を心に期した。それは「還暦までは全力で働き、その後は蓄えた財を社会公共のために使う」というものであった。世の多くの富豪が財力にものをいわせ奢侈逸楽をこととしたのにくらべ、彼の生活が一生涯きわめて簡素であったのは、この信念を貫き通したためである。

巨額の富の蓄積

吉次郎が実業の社会で飛躍する契機となったのはイギリス人E・H・ハンターとの親交からである。ハンターは幕末に日本が開港するや神戸で貿易や造船業を積極的に営み、日本女性を妻とし、生野区北野の山腹に居を構え（現神戸市王子公園内・異人館ハンター邸、重文）、長男竜太郎は範多家を起こしたように、きわめて親日家であった。

ハンターは明治一八年（一八八五）、精米所を建設し、日本米の輸出を手がけたが、翌年焼失の憂き目にあう。しかし、米の輸出の将来性に確信を持つハンターは、これを機に同志を日本人に求め、日本精米株式会社を設立、今出在家町に大精米所を建設した。この工場はハンターと神戸の豪商北風正造が各々三分の一を出資、残りを一般から募集したが、藩政時代から加賀藩及び木谷家と親交のあった北風家との縁で、吉次郎は、この会社で働くことになる。やがて才能を見込まれ、三五歳で専務取締役に選任されたのを機会に、明治二五年（一八九二）神戸に移住し、本格的に会社経営に当たることになったのである。

吉次郎が情熱を傾けた日本精米株式会社は、日清、日露戦争における軍用米納入という幸運にも恵まれ、着々と業績を伸ばしたが、明治三九年（一九〇六）会社改革を最後に、吉次郎は身を引き、その後は、日本毛織株式会社の創設に加わり、同社の重役として活躍、各種企業への積極的な投資で巨額の資産を蓄積した。

実業家としての神戸の生活は一見華やかで酒宴の席も多かったと想像される。また、家族との桜、紅葉、納涼などの清遊の記録も残っているが、生活そのものは決してはでにはせず、節約に努める一方、このころからすでに村内産業奨励のための寄付や金沢育児院など

木谷吉次郎の筆跡

への慈善事業に対する援助を惜しまなかった。

報恩の余生へ

実業界に身を投ずる際の決意どおり六三歳で引退した吉次郎は、報恩の余生に入るため大正九年（一九二〇）神戸を後に故郷粟崎に帰った。

故郷に帰り吉次郎が報恩の道として選んだのは育英であった。吉次郎から学資や研究費の援助を受けた者の数は、彼自身語ることがなかったため明確ではないが、乏しい資料のみでも、当初から地元の中学校、金沢高等工業学校、第四高等学校、金沢医科大学などの学生のみならず、神戸商業学校、東京、京都、東北の各帝国大学、京都蚕業学校、名古屋高等工業学校、愛知医科大学、東京高等工芸大学、京都大谷大学院などの学生など全国に及び、その金額はきわめて巨額であった。

その後、援助額と援助学生の数は増え、昭和一〇年代には、地元粟崎村における中学校以上の学生のほとんどに援助が拡大された。

吉次郎は、このような学資援助に対し、いささかの返金、一切の代償を求めることなく無期待に徹した。高等学校から東京帝国大学卒業まで吉次郎の援助を受け、その後朝日新聞社で活躍する高垣金三郎氏は、大学時代に吉次郎を訪ねたときの印象を次のように語っている。

木谷家の屋敷を利用して作られた公園内の顕彰碑

「まさに地方の陰徳の士という感じがした。質素な住居の中につつましい生活をしながら、われわれ関西の貧乏書生にまで援助の手をさしのべてくださることについて、深い感銘をうけるとともに何かすまないような気がした。東洋的な人格者とはこんな人をいうのだろうかと、若いながらに心に印象づけられた」と。

少壮学者や農村青年の育成

吉次郎の援助は、このような苦学生に対する学資援助にとどまらなかった。日本の放射線生物学及び腫瘍の細胞学的研究者で、X線作用の研究の功績によりシグマ・サイ協会会員に推薦された小室英夫教授も、吉次郎が研究費を援助した一人であるが、小室教授が昭和一三年（一九三八）に発表した著書『癌細胞研究上ノ新方式』は、吉次郎にささげられている。小室教授もまた、吉次郎の陰徳ぶりについて、「木谷さんは全く無私のかたであり、純粋に研究を助けるということ以外に他意はなく、実に清らかな心の持ち主であった。普通の人は売名であり、援助には条件があった。したがって何らかの形で代償を求める場合が多い。しかし、翁の場合は全くの無条件であり、しかも長年にわたって黙って届けてくださった。ああいう人こそ真に偉い人であり、心から尊敬していた」と語っている。

また、吉次郎は、大学、高専、研究機関の若い研究者たちを海外へ留学させるため巨額の援助をすると同時に、農村青壮年の育成にも力を注いだ。砂丘地農業というハンディを背負った地元の農村青年たちを先進地に派遣し、温室建設に資金を与え、砂丘地の村に近代農業の息吹きを持ち込ませた。

このほか、地元粟崎小学校を中心に全国の学校に多額の寄付をすると同時に、県体育協会や県立図書館などの社会教育施設、日本赤十字社や消防団、結核予防会など多くの社会施設などにも、ときには名を秘して寄付を寄せ、明らかなものだけでその総額は現在の貨幣価値で二〇億円ほどに上っている。

禁酒禁煙運動の展開

吉次郎は青年時代からかなりの酒豪であったが、明治四一年（一九〇八）「本日ヨリ禁酒実行ス、交際上二八一、二杯ヲ限リノ事」との決意をし、帰郷後は酒を口にせず、当時の禁酒運動家浜谷理吉郎氏を援助し、村民にも禁酒を提唱した。この禁酒運動は青年団運動に持ち込まれ、粟崎村に根付いて、昭和三年（一九二八）には、青年団の名で同村小学校の校庭に「禁酒断行」の標柱が建てられた。やがてこの運動は、県下に広がり、同五年には、石川県禁酒団体連盟が結成された。

粟崎小学校校庭に建てられた禁酒標柱
（昭和３年）

酒とともに吉次郎は壮年時代までかなり吸っていたたばこも断った。ある人が「禁酒禁煙とは厳しすぎるのではないか」と言ったところ、吉次郎は、「ニコチンの毒を吸うとは以ての外なり」と戒めたという。

昭和一〇年代の初め、吉次郎の援助を受けた人々が木谷会を結成し、伊豆伊東に吉次郎の恩を忘れないために、拠金で週末などに集まり語るための粗末な小屋を建て、「感恩荘」と名付けたが、これに感動した吉次郎は、それとは別に付近に一棟の建物を建て、「無期待荘」と名付け、彼らの利用に供した。ここに集まった人々は、「友仁」なる会誌を発行したが、その会誌に一文を寄せた社会教育家山下信義氏は、「どの道から進んでもよい。どうか人類お互いのためになる人となってもらいたい。それが自分の願いである。そのほかには何の期待もない」と吉次郎が語ったことを記しているが、吉次郎の人生観を端的に表している言葉ではなかろうか。

吉次郎は、昭和二四年（一九四九）、九二歳でその生涯を閉じた。生前、すでに二千余坪の宅地及び住居とその維持費一万円を金沢市に寄付し、絶家することを遺言としてしたため、また、「木谷教育資金之会」を組織し、学資援助を続けることを計画したが、教育資金は当時のインフレで数年にして打ち切らざるを得なくなってしまった。敷地は現在木谷公園として整備され、昭和四〇年（一九六五）、園内に顕彰碑が建てられた。今は市民の憩いの場となっている。

【参考文献】清水隆久著『木谷吉次郎翁』

（石川県教育委員会教職員課
特殊学校管理係長　徳田寿秋）

郷土に生きる教育家群像㊹福井県

自発教育の先導的実践家

三好得恵

三好の学校観

今日、日本の学校において授業をする部屋を教室と称しているのが一般的であろう。「学校は児童の社会である。児童の国である。教師は児童の伴侶であり援助者である。故に我校では児童の前には訓導の名を用ゐず総て輔導者と呼び教授の語を廃して輔導と称し、教室を学習室と改めている。」と述べている三好の言葉の中に彼の学校観を端的にうかがうことができる。新しい教育課程が実施され、学習者主体の教育が実施されようとしている現在、今から遡ること七〇余年も前に、児童一人一人を尊重し、学習者の主体性を重視した教育が行われていたことは驚嘆に値する。

三好の生涯

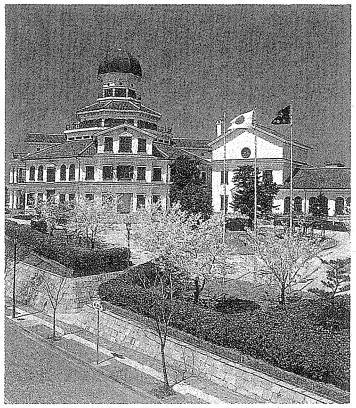
三好得恵は、明治一三年福井県西鯖江村（現在の鯖江市）上小路に、父村上与作、母カトの次男として生まれた。数え年五歳のとき、福井県丹生郡四箇浦村の導善寺の住職三好得開の養子となっている。導善寺は、鯖江の城下町から数里の山を越えた海岸にあり、三好の次男である秋田慶行氏によれば「鯖江藩の旧士族から貧乏寺へやってきたということは、数奇な運命であり、このことがまた彼の教育観を育てる機縁となったことは不思議な仏縁である」と述懐している。三好は、地元の尋常高等小学校の温習科（小学校四年生程度）を卒業した。成績も抜群であったので、しばらく代用教員をしていたようである。代用教員の間に父得開が病死し、日清戦争もあり、生活は赤貧洗うがごとくであったという。

その後福井県尋常師範学校講習科に入り、福井県師範学校に進んでいる。師範学校を優秀な成績で卒業した三好は丹生郡四ケ浦尋常高等小学校訓導に任ぜられ五年の奉職の後、福井師範附属小学校訓導となる。奈良女子高等師範学校に附属小学校が創立されるや、抜擢され、八年九か月在任した。その後、郷里の人々の懇請によって、大正八年末、三国尋常高等小学校長に迎えられ「教育は須く自発学習の輔導にあり」と、自発輔導主義の教育を提唱し、昭和八年に停年退職するまで、一五年にわたって自発教育を実践した。その後、教育活動、ことに宗教活動に専念し、昭和三四年丹生郡越前町の自宅で死去した。享年七八歳。生存中に従七位、勲七等を受けている。

三好の教育理念と自発教育

「吾人は自我の本質に根ざして自覚内省した時、如何に自己をして無限に拡充進展せしめようとする欲求に燃える時、真に人としての生活があり、人として生活する時、人格の向上となり、堅実な文化生活者となるのである。即ち自覚による内面的活動、即ち人として生活せしめることは、人として教育することができる」（三好得恵著『自発教育概要』から）。

この三好の教育理念は、今日の教育界でとかく取りざたされている「自己教育力」であり、「自己実現」の教育そのものである。当時奈良女子高等師範学校では、一斉学習を廃した分団学習、今でいう習熟度別学習が実践されていたが、三好は分団学習のよさを認めながらも、もっと児童の個性を尊重した教育がなされるべきであるとしている。『自発教育概要』によれば、



復元された「龍翔館」（三国尋常高等小学校の前身。明治12年竣工、オランダ人技師エッセルの設計による）

1 自発教育の主張
2 我校に於ける自発教育の歴程
3 自発的学習要件
4 学習の実際
5 自主的学習より生まれたる利点

という五項目が設定されている。先述の理念は、1の項目で述べられている。

2では、自発教育の歴史的展開を次のように述べている。「一九二〇年一月、自発教育を以て教育方針と定めて、其の準備に着手し、同年4月より愈々実施することに至った。当時、我国の教育は理論としての自学主義、自動主義は叫ばれてゐたが、其の実際に至っては未だ毫も手を着けるものがなかったのである」と、三国尋常高等小学校で自発教育を立案し、展開した経過を述べている。

3では、「自発教育は自覚的生活にまでの教育である」と前提して、学習者の自由ということが輔導の主要件として挙げられ、その範囲と程度によって次のように区別している。

(1) 学習材料選択の自由
(2) 学習方法建設の自由
(3) 学習材料進度の自由
(4) 学習材料蒐集の自由

(1)から(4)までの事項は今日の教育を考える

上で極めて示唆に富み、かつ学ぶべきことを彷彿させる事柄ばかりである。

(1)に関して「法令の定めた幾多の教科目に配当された時数は、全学級児童が毎日同一時間に画一的に学習し了らなければ、真の学習が出来ぬといふ訳ではない筈である。近来、児童中心の学習を口にしながらも、依然として同一学年を以って集団を組織し、同一教材を一斉的に取扱ひ注入詰込の型式を反覆して居るのが、未だ我国の現状である」と述べており、一斉学習による画一的な指導法や注入・詰め込みの教授法を否定している。また、法令の範囲内での教育課程の編成の創意工夫を主張しているが、これらはまさに新学習指導要領の趣旨そのものである。さらに、「学校教育といふ有限の期間内に於ては、無限の材料中より適確にして価値あるものを精選し、高き能率にて学習をなさしむべきである。而してこれが取捨選択は学習者即ち児童各自の能力と趣味と技能とにより」と個別の配慮が必要とされるべきことを述べている。「適確にして価値在るものを精選し」は、今日の表現にすれば、基礎・基本の重視、教材の精選ということであり、「児童各自の能力と趣味と技能とにより」は、個別化・個性化という言葉に置き換えられるものである。

(2)に関しては、従来の教授法のような論理的・心理的な研究に対して、児童に即した学習法が研究されるべきであることを述べている。すなわち「児童の個性を尊重し、児童自身の生活を無限にまで進展せしめんとする教育は、児童の個性の上に学習方法上の創造があり、建設があることを認容すべく、必ずしも五段三段の順序を唯一無二の方法と見ることが出来ない……茲に児童各自に学習方法の建設を激奨し、教師は児童の学習方法に対する相談役とならねばならないのである」三好の主張する自主学習においては、教師は学習事項を授与伝達することを避け、学習方法の輔導の任に当たるものとしている。

(3)に関しては、前述のように、学習材料の選定や方法を自由に推進するものであるから、学習の進度もまた自由でなくてはならないと説く。すなわち、「学習すべき材料の進度範囲を制限し、自由ならしめないといふことは、自発的学習の輔導とはいへない」と、学習の進度を問題にしている。

この点については、学年のはじめに全学年間の題材割当表を示し、ある題材の学習におよそ何時間を要し、何月ごろ学習すれば相当の進度になるのか、学級学習としては何時間を要するか、学年末までにはどこまで進むべきかを予知し得るようにしている。学習進度表は学習室に掲げ、その一つは教師の輔導に備え、他の一つは児童自ら学習進度を見られるようにしている。教師は児童を個人的に考査し、その結果によって合否を決めている。

地理室での学習

(4)に関して三好は環境の重大さを説き、三国尋常高等小学校では、その工夫として、教室の名を改めて学習室と呼び、算術室、地理室、歴史室、等々の一一以上の特別学習室を設置している。

4の「学習の実際」では児童の意志の自由を自己の規範として、自由に活躍させることを方法上の理想とするのであり、換言すれば児童を尊重し、彼らの自覚性を培養して、その創造力の進展を期するのであるが、そのために三好は自主学習、学習輔導者としての教師の在り方、学級単位での自主学習に言及している。

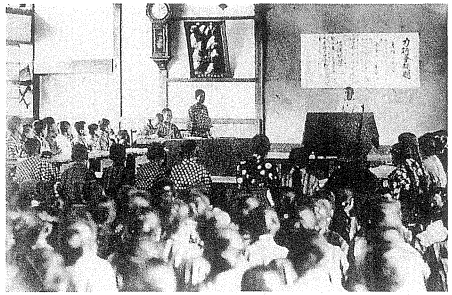
5の「自主学習の利点」では、今日でいう関心・意欲・態度・自主性・主体性・自律的学習、望ましい価値観、計画性の形成などをあげている。

今に生きる三好の教育

大正一三年、その当時の教育界における世界的権威者であり、かのドルトンプランの創始者であるパーカストが三国尋常高等小学校を訪れている。三好の実践はドルトンプランの模倣ではないかと評価されているむきがあるが、三好の自発教育はパーカストがドルトンプランを試行している間の実践であり、ドルトンプランの適用では決してない。しかし、自由教育という点で共通しており、現在においても通じるものがある。三好の自発教育はこの当時高く評価され、それを聞いていたパーカストは三国尋常高等小学校を来訪することを強く希望しており、それが実現したのである。女史は自らの写真に「かねて希望であったこの学校を見る今日一日を喜ぶ」と自署し、そのときの喜びを書き残している。

パーカスト女史のみならず三国尋常高等小学校を見学に訪れる者は毎日のことであり、当時の訓導であった三国町在住の本田ツタ氏によれば、研究発表会の日には参観者が京福電鉄三国の駅前から学校まで約一㎞の間行列をなしたという。

今日、学校教育のひずみとして、校内暴力やいじめ、不登校など憂うべき教育の病理現象が問題とされているが、新しい学習指導要領においては、これらの諸問題に対応すべく自己教育力の育成や個を生かす教育、学習者主体の教育を重要視している。時代背景、世相等々に違いはあるものの、今日、三好の学校観や教育理念、教育方法に学ぶことは多大である。



力行会（現在の児童会活動）

パーカスト女史（中央）の来訪（大正13年４月）
三好は女史の左横（着座）

〔参考・引用文献〕
『日本新教育百年史2総説』（玉川大学出版部）
『三好得恵と自発教育』秋田慶行著

（福井県教育研究所主査　西山晴二）

郷土に生きる教育家群像⑪山梨県

故郷の自然と土への頌歌

師道を貫いた 堀内常太郎

母なる山と常太郎が敬愛した八ヶ岳の南麓、長坂台地に、柳南・堀内常太郎の人と行実を称えた「師道碑」は立っている。

常太郎の薫陶を受けた子弟、後輩、地域住民によって建立されたものである。

一、素描―堀内常太郎の生涯

柳南・堀内常太郎は明治六年四月二〇日、北巨摩郡秋田村（現長坂町）に生まれた。柳南はその俳号である。常太郎の教師生活は明治二九年、山梨尋常師範学校を卒業、谷村尋常高等小学校の訓導となったのにはじまる。南都留郡明見村尋常高等小学校長となったのは二八歳のときであった。以後県下各地の小学校長、教育会の理事、会長などを歴任、昭和六年三月三一日、村山西小学校長をもって、長い教育活動を終えた。そして文芸をもって、山梨の社会教育推進にむけ、その活動を開始した直後、昭和七年二月一〇日、惜しくも病没した。

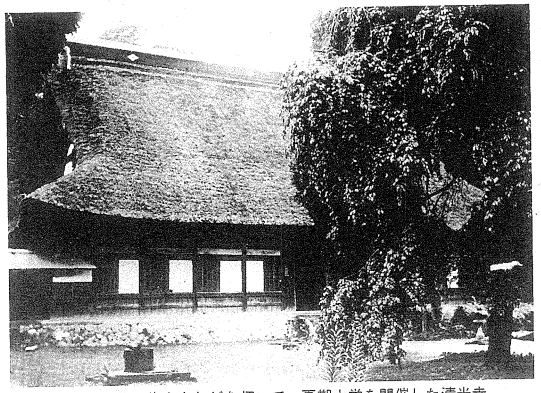
頌徳碑、「師道碑」は昭和一一年六月二日、「堀内常太郎先生頌徳碑建設会」の手によって建立除幕されたものである。

二、児童教育の多彩な展開

訓導兼校長として常太郎が在任した小学校は南都留郡明見小学校、南巨摩郡身延小学校、北巨摩郡下では竜岡小学校、秋田小学校、小淵沢小学校、泉小学校、村山西小学校である。

こうした学校における彼の学校経営を支えた教育理念は児童の創造性と純粋性への信頼にあった。小淵沢小学校長時代、勤労教育として学校林の下草刈りを実施したが、彼は児童とともに下草を刈り、休息時間を利用しては絶えず児童と対話している。彼の「下草刈りの記」には「児童等よ。汝等の内にこそ創造的生命はあるのだ。新生命の展開に躊躇するな」とある。また作業の後、「児童と握飯を食ふなどこれは私共のみ有る快事である」とも書いている。

これも小淵沢小学校時代、彼は児童に一坪農園経営を行わせている。一坪農園日記を書かせ、生産品の展示会を開催したが、「彼らの意志を尊重し、決して私共より添削を加へ」なかった。それは児童の主体的創造性を信じ、その可能性を開発しようという教育理念によるものであった。彼の子息乗氏所蔵の文芸教材集に「むぎの笛」という稿本があるが、それは常太郎が自ら創作した童謡、童話集で、挿絵も自作である。児童の豊かな感性を育て、表現の喜びを実感させるための教材集である。



大正12年8月に芥川龍之介などを招いて、夏期大学を開催した清光寺

三、ユニークで斬新な現職教育の推進

彼の勤務校には必ず教師の読書会が組織されたが、北巨摩教育会の会長となるとこれを拡大し、教師の研修のための夏期大学を開催、教師の資質向上に努めた。大正一二年八月、秋田村、清光寺で開催した夏期大学は哲学者得能文や芥川龍之介を講師とするもので、芥川は「人生と文芸」と題して講義を行っている。芥川はその折、常太郎宅で、「藤の花　軒場の苔の　老いにけり」という句を創作、揮毫している。開催期間は四日間であった。

また北巨摩教育会第三支会においては、アララギ同人の森山汀川を諏訪から招き、毎月一回の「万葉集講義」を聞いている。その際短歌の創作をも試み、汀川の指導を受けている。小沢杉男氏所有の「諏訪の湖」で始まる絶唱の柳南筆の半切は会員小沢輝時に与えたものである。

授業研究会の開催、郷土文学の研究とその教材化など、「山梨教育」（教育会雑誌）を繙くと常太郎の情熱的な現職教育の足跡が明らかとなる。

四、農村青年の育成―講義と教育相談―

青年の教育にかかわる常太郎の教育実践の

特質に「卒業生招集」という補習教育の推進がある。毎月一回、学校に卒業生を招集し、社会や人生に関する講話、春秋二度の遠足、秋には農作物の展示会などを開催している。およそ卒業生が二〇歳になるまでこれは継続されていた。柳南の随筆集「高原より」（「峡中日報」大正四年一二月三日号）によるとそれは「国民として、イヤ人間としてあらゆる方面にわたる教育で、精神的、人格的により一層青年を転化進捗」させることを目的としていた。

一方、常太郎の青年相手の相談活動は人生、社会、社会的階層に関する差別の問題など多様であった。しかもその相手は北巨摩郡一円に及んでおり、青年会への出講後に行われる場合などは深夜に至って終わるといった状態であった。

五、文芸の創作と文学教育

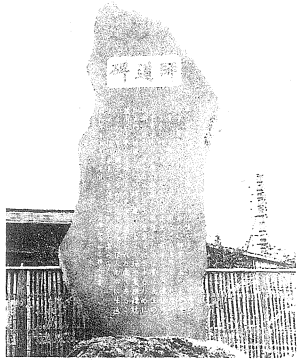
教育者である一方、常太郎は柳南と号する俳人でもあった。彼の文学回顧録によると俳句への接近は山梨尋常師範学校時代に、正岡子規に親しんだことに始まる。そして河東碧梧桐に私淑、大正中期には井泉水らの「層雲」の会員となり、秋山秋紅蓼とともに山梨を代表する新傾向俳句の推進者となった。

横浜の「短詩社」刊行の俳誌「短詩」には作品を毎号掲載している。

アア堪へがたし亢奮の刃を渡る雲

「短詩」大正五年一〇月号掲載作品である。彼が童話や童謡をも創作したことについては既にふれたが、こうした柳南の文芸活動は児童のための国語教育と地域住民の教養形成とに転移された。

垣内松三は国文学誌第二巻五号の「形象理論と国語教育」で「読方教育史は大正中期以後と以前と対照して明らかに一線をかくされた」と述べているが、柳南はこの国語教育の変革期にいち早く垣内理論を受容し、山梨の読み方教育に新生の気を吹き込んでいる。また垣内松三を招き県内の国語担当教師の資質の向上をも図っている。なお、柳南の教育実践については垣内松三の「国語の力」でもふれられている。



中央線・長坂駅頭の丘の上に立つ頌徳碑「師道碑」昭和11年6月2日除幕式

一方「峡中日報」紙の俳壇の選者として、新しい俳句の推進、「初刊文芸」誌の選者として地方文芸の興隆にも大いに寄与している。

六、郷土研究と郷土教育の推進

大正初年から同僚教師らと郷土文学の研究サークルを組織していたが、大正一五年六月、北巨摩教育会の会長に就任すると、国語科研究部を創設、その事業の一つとして「郷土文学の研究」を開始した。彼が最も敬愛した八ヶ岳をめぐる文芸作品の収集、教材化、故郷秋田村大八田の建岡神社の本居大平らによる「法楽百首歌」の飜刻などはその成果の一つである。

常太郎の晩年の大きな事業に「北巨摩郡勢一班」の編集・刊行がある。これは既刊の「北巨摩郡誌」の増補改訂版ともいうべきもので、郡下の全教師を動員して行われた総合北巨摩郡史の研究である。常太郎は北巨摩教育会長として自ら編集発行人となり、序文をも執筆している。

こうした郡誌の編纂作業の過程で郡下の教師たちは郷土認識を深め、その資料は郷土教育の教材となって、児童のふる里認識の形成に大いに役立っている。

七、移動図書館による住民教育

山梨県立図書館所蔵の「北巨摩教育会資料」によると、北巨摩教育会主催で、郡下一円に成人や青年のための移動図書館を開設している。前掲図書館所蔵資料のうちに、教師らの手で行われた膨大な読書調査記録があるが、それは常太郎らの読書教育が単純浮薄なそれでなく、郡下の住民の読書意識や問題意識を探りながらの、真摯な教育運動であったことを証している。

八、教育の実践的組織者・堀内常太郎

常太郎の偉大さは教師集団の組織化であるとともに、常に組織の活性化を図った点にある。

大正一五年六月、山梨教育会とは別に、北巨摩教育会を設立したが、その際の財産目録をみると図書一〇〇〇冊を超える蔵書を持つ図書館、植林地四二八町歩、蓄積金一〇〇〇余円などが着目されるが、これらは常太郎らの町村役場への対応、農事組合との折衝、会員教師の意識形成に負うところ大であった。

山梨教育会の役員、北巨摩教育会の会長など教師組織のリーダーとして活躍する傍ら、彼は鰍沢地区での俳句サークル作り、童話創作会など多様な教師の自主活動組織を作って、教師の教育力形成に努めているのである。

九、八ヶ岳の麓の人々を愛した教育者

常太郎が生涯をかけて愛したのは八ヶ岳と

堀内常太郎と本人の筆跡

そこに生きる人々であった。彼は学校農園で子らと作業した後「私は伏しておもふ様キスをしたくなったのであります」と八ヶ岳について、「高原より」で述べている。彼の郷土教育、児童の勤労生産学習、農村青年の農業生産物の展示会などはすべて八ヶ岳にシンボライズされた故郷の自然と土とへの頌歌の教育的具現化にほかならない。

赤い旭の田の中に回り居る水車

同人誌「常世集」中の作品である。柳南がいとしんだ田園風景である。「人間の『内在』と自然の生命とが合一するところに真実がある」という信念の人であった。彼は児童の「純なる精気」を自然の生命にふれさせることを唯一の教育方法と考えた教育者であった。だから彼はあらゆる虚飾と技巧とを拒否し続けて生きたのである。

昭和四年一二月一四日付「峡中日報」紙によると、彼は同村の葬儀にかかわって墓掘りを行っている。正八位に叙せられた小学校長としては希有の作業である。「私の父の時にも、妻の時にもけふの仏は今日の私のように穴を掘ってくれたのだ」とつぶやきながら墓を掘るのであった。そして「穴の底より厳粛なる響を聞き、敬虔なる振動」を感得するのであった。

こうした堀内常太郎の生きざまが多くの村人たちや教え子、教師仲間を感動させたのである。没後ただちに頌徳碑建設会の設立が発議され、頌徳碑「師道碑」が建立されたのである。

「層雲」掲載の柳南の句。

八ヶ岳くもれば鳥の歌おもたき粟の花かな

●参考文献　山梨百科辞典（山梨日日新聞社刊）
峡中文人録（渋谷　俊著）

（元甲府西高校長、山梨県教育委員会嘱託　松本武秀）

郷土に生きる教育家群像⑨長野県

信州教育の源流『泉野教育』に生涯をかけた

藤森省吾

一、『泉野教育』の樹立

藤森省吾先生は明治一八年二月一〇日信州上諏訪町に生まれ、旧制諏訪中学校を卒業し、母校高島小学校に代用教員として奉職、島木赤彦・森屋喜七の両先生の薫陶を受ける。のち長野師範学校を卒業、大正七年五月、三四歳で泉野小学校長兼泉野実業補習学校長となる。二か年足らずして高島小学校首席訓導に転出、郡の教育刷新の使命を果たした後、昭和三年三月自ら進んで八ヶ岳山麓の寒村泉野村に骨を埋める覚悟で再任し、その心血を注ぐこと一五か年、ついに信州教育の源流たるべき農村教育を、『泉野教育』として樹立したのである。

二、『泉野教育』の素描

『泉野教育』の全貌は容易に述べ尽くし難いので、実践に即して三つの角度から素描を試みることにしよう。

(1) 農村教育の角度からの素描

これは、村づくりの教育である。当時見過ごされていた農村を、教育によって、国家の原動力として役立つ農村に更生する教育である。

①村の小学校と補習学校を一体として経営し、村の教育の一貫した体系を立てる。

②学校職員は永年勤続を心掛け、各聚落に分住して村民の実態に触れさせて、その指導の具体化・適切化を図る。

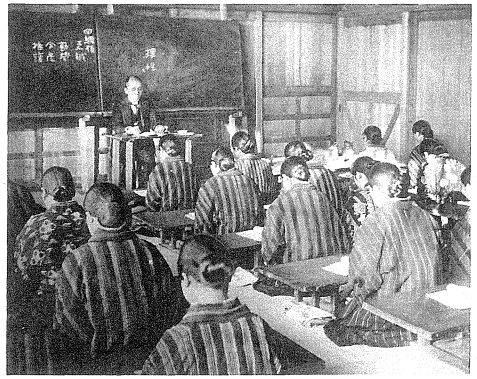
③校長から全職員児童生徒に至るまで、愛農精神・重農思想が徹底し、全学年にわたって農耕実習を課して、これをすべての教育活動の集約の場としている。

④小学校の全職員は補習学校の指導員となり、補習学校の全職員は小学校の農耕作業を指導し、両校の職員は一丸となって教育実践に当たり、更に郊外の各聚落の青少年指導に当たっている。

⑤学校の回りの全校地を学校農場として経営し、児童・生徒・村人を対象として作物や家畜の愛育を中心とする農業教育を行う。

⑥学校農場は村の中流農家の経営を目安として運営し、農生産の第一線に立つとともに、村の農事試験場として産業開発の使命を担い、果樹・畜産の指導を行う。

⑦小学校高等科の農業指導では、正課の学級実習の外に、放課後から夕暮れまで戸外雑業に当たる組分け実習や家畜飼育の当番実習を課し、培養日誌や家庭勤労日誌を必ず書かせ、試食会や収穫祝を催し、学校生活そのままが農民魂の錬磨、農民的情操の育成となる。



(2) 青年教育の角度からの素描

これは、村の後継者づくりの教育である。小学校卒業以後教育に縁のなかった青年を集めて、校長と首席訓導が陣頭に立って早朝教育を創始し、青年の生き方に自覚を促し、後継者としての資質を高める教育である。

①補習学校は、男女ともに朝学を本体とする通年五か年制とし、外に特殊職業の鋸鍛冶徒弟の特別学級と八ヶ岳御料林の伐木事業所従業員の美濃戸分室出張授業も併せ行う。

②夏は朝学、冬は昼学を採用し、常に学習と勤労とを並行する。朝学は四月から一一月、朝五時から七時までの二時間を一教科の学習として行う。一週間のうち修身一回、数学二回、国語三回を繰り返す。七時には帰宅を急ぎ朝食のあと終日農作業。冬の昼学は一二月から三月まで。午前中四時間の教科学習、全人教養のため多教科にわたる。午後は四時間薬加工実習、低学年は自家用品の計画生産、高学年は副業として薬工品の生産。

③農業科と家庭科の技術指導には、村内外の第一人者を師匠として招聘し、教師とともにその専門的指導を受ける。例えば薬細工、木工、草刈、機織り、染色等。

④人生における重要な時期である一七歳の生徒の指導のため、小学校高等科担任教師を義務的にその時点まで在職させ、在学中の生徒の教育相談に応ずるとともに就職などのため村を出る生徒の職業相談に応ずる。

⑤補習学校の農業指導は、家庭における農業

実習ということで生徒個人に責任農園を経営させて農業技術の向上を図るほか、朝実習によって農民としての躾を身につけさせる。また開墾農場の班別共同実習によって開拓精神と社会的集団訓練を行う。更に農道修練手帳を活用し、その積み重ねによって農道進級証を与え、農作物品評会や収穫祝賀会を開催するなど生徒の日常生活そのままが農道修練の場になるよう企画されている。

⑥学校から東へ四㎞、八ヶ岳裾野の上原山に総面積六㏊、開墾耕地三㏊に宿泊舎・炊事舎・管理舎を有する中原農場を経営して、児童生徒に開拓精神を養うために、宿泊訓練や班別共同実習を行う。

このようにして補習学校への就学や朝学への出席は、村の青年子女の当然のつとめであるという気風が村に出来上がった。だが、ここに至るまでには、全職員の機を逸しない勧誘と労を惜しまない絶えざる努力の積み重ねを要した。なぜならちょっと油断するとすぐ逆戻りするからである。

(3) 青年教師育成の角度からの素描

これは、教師づくりの教育である。藤森先生は、「農村教育の中核は青年教育にあり、青年教育の核心は青年教師の育成にある」と考えて、若い教師を集め、指導育成して青年教育に取り組ませた。

①職員に、教育の重要性と尊厳を自覚させ、教師の使命感を高揚した。

②教育のことについては、あくまで厳粛性を求め、職員に妥協を許さずきびしく叱正した。

③叱るときは面と向かって叱り、褒めるときは人を介して褒めた。職員からの申し出は、よい事でも一応は否定されて、職員の考えを更に深めさせた。

④職員の授業を見て回り、よく批評して指導した。極めて的確に急所を指摘されるので、藤森先生に授業を見てもらうには、かなりの覚悟が必要であった。これをおそれて授業の指導を敬遠していると、藤森先生の方からいつ見に行くから予定しておくようにと指名された。

⑤教師の勉強法として次の「三種の勉強」を必ず実行させた。

(1) 放課後、直接授業に関する勉強は必ず学校でやる。

(2) 夜、宿舎でする学問の勉強は指導者の手引によって系統的継続的に行う。

(3) 朝、宿舎において短時間継続的に修養の書を読む。

⑥計画的な勉強を勧め、一人ひとりの職員について勉強の系統案を立ててくれた。そして勉強の実践報告を求めて指導を徹底した。

⑦座り込め、座り直せ、のり出せ。校長は村へ座り込め、教務主任は学校へ座り込め。教師は担任のクラスへ座り込めと指導した。

⑧中道を歩め。総合的判断をせよ。複雑体としての人生や社会を見誤るな。

⑨年度の初めと終わり、学期の初めと終わりには必ず職員会において、職員一人ひとりの分担に即して計画と反省を取り上げて指導した。夕闇の迫る職員室で、厳粛な雰囲気の中、職員たちはだれもが教育の尊厳を強く感じた。

⑩藤森先生は昭和三年の再任以来退職されるまで、ずっと職員に論語の講義を続けた。論語の内容に即して自分自身の人生観・教育観・社会観を自由に述べた。それは教師の成長に大きな力となった。

このように、泉野学校の日々の教育活動は、全職員の責任共同体として運営され、職員はその人間の力の総和による生きた教育の魅力を自覚し、体験して、使命感に燃えて成長したのである。

泉野学校歌

土田耕平作詩
羽場匡雄作曲

一

八ヶ嶽高き峰々
裾野原広き限々
流れ来る水のたぎちは
書まなぶ我らの伴よ

二

柳川の流れを清み
泉野のこの故里に
百枝槻厳槻生ひ竝み
おのづから成れる学舎

三

書よむは聖のすすめ
人たるも学ありてこそ
ああ我ら心はげまし
一すじの道を進まむ

四

悦びは学びの庭に
楽しみは友の真垣に
この道や直くまどけし
あまつさへ粧ふ山野を

五

春は萠え秋は朱葉と
国柄の高さを思へ
日月の光あまねく
山川の絶ゆる時なし

――いや栄え泉野学校

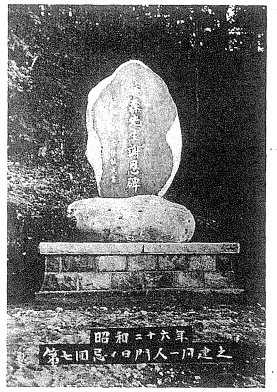
(昭和一五年八月一九日文部省認定)

三、よき師、よき友、よき門弟

藤森先生にはよき師があった。島木赤彦・守屋喜七・村松民次郎・三村安治の諸先生。またよき友があった。岩波茂雄・西尾実・金原省吾・今井登志喜・藤原咲平の諸氏。

ここに岩波茂雄の書いた弔辞がある。友はその中で次のように述べている。

『君は如何なる場合に於ても妥協せず調子を変えず、思う所を断々乎として率直に披瀝して憚らない。君の言う所は何らの潤色なき正味そのものである。君が交友に畏敬せられ後輩に尊敬せられたのはこれが為である。多くの教育者は山間より都会に出ずるを喜ぶのであるが、君は上諏訪の高島小学校より自ら志して八ヶ岳山麓の寒村なる泉野小学校に転じた。君はかかる僻陬の地こそ思うままに教育をなすに適はしい地と確信したのである。



この境涯に於いて教育に尽すこと約二〇年、郷村の子弟の為に一意専心、所信を貫くことに努力した。君が教育功労者として文部省より表彰せられ又村が内務省より模範村に指定されるに至ったことも当然の結果と言わねばならぬ。君は郷党に尊敬され、泉野村の二宮尊徳と呼ばれた。頑固と言われる程信念に忠実であって、何人も教育に終始する一貫の態度は認めざるを得ない。六一年の君の生涯は全部教育に捧げられたと言って過言ではないと思う。国歩艱難の此の現時に於て君の如きは地の塩、世の光として一日も永く此の世に生きていて貰いたかった。……』

また、藤森先生を慕う門弟も多く、昭和二六年には門弟一同により「藤森先生謝恩碑」(安倍能成書)が校地近くに建立された。

更に、先生の教育実績がまとめられて、『藤森省吾先生』が昭和二三年五月信濃教育会から、『藤森省吾先生の教育』が昭和三八年一〇月諏訪教育会から、りんどう双書20『藤森省吾先生の教育』が昭和五七年四月信濃教育会出版部からそれぞれ発行されている。

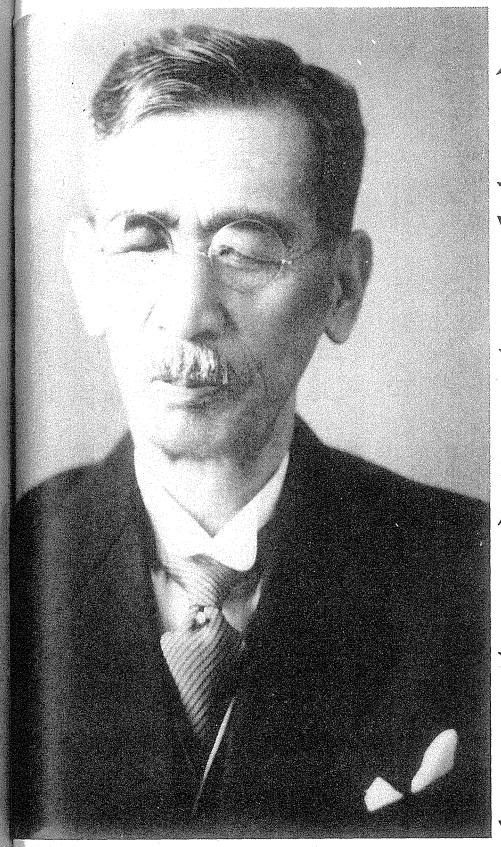
『藤森省吾先生の教育研究資料』は昭和五二年一一月、三三回忌の法要当日に収集完了展示公開された。いま、その資料が一括され、目録表とともに泉野小学校に保管されている。

(元泉野補習学校教諭　小林繁治)

郷土に生きる教育家群像㉖岐阜県

逆境を生かして盲教育に尽くす

小坂井桂次郎



突然の障害

小坂井桂次郎は、明治一四年七月一三日、岐阜木造町の瓦職人、小坂井兵吉、つねの三男として生まれた。

父兵吉は、いったん仕事にかかると手をぬくことを嫌い「兵吉さの仕事」と一目で分かる職人気質の人であった。しかし、家庭では、「桂次郎、あんやに負けんように勉強せい」とやさしく励ます父親であった。

一方、母つねは、桂次郎が岐阜尋常小学校で習ってきた唱歌を一緒に歌うことを楽しみにするような明るい人であり、七人のこども

たちが学校で学んでくる内容を一つ一つ聞き、共に勉強する教育熱心な母であった。

桂次郎は、こうした両親と仲のよい兄弟にもまれながら、やさしく明るい環境の中ですくすくと育っていった。

ところが、この明るさをすっぽり包み込んでしまう暗い事件が襲ってきた。

明治二四年一〇月二八日、午前六時三〇分、突如として大地を揺るがした濃尾大震災がそれであった。

そのとき、井戸端で顔を洗っていた一一歳の桂次郎は、家が地響きをたてて倒壊する寸前「かあさん逃げろ」と叫びつつ庭へ逃れた。しかし母は、末のこどもを抱きかかえて逃げおくれ、敷居と鴨居の間にはさまって絶命した。

そればかりでなく桂次郎を突き刺すような災いが、再びふりかかってきた。その日は大晦日であった。煤払いを終わった桂次郎は、近所の銭湯へ出かけ、しまい湯につかった。

翌朝、起きてみると右目に目やにがこびりつき、はれ上がっていた。正月のことであり、神社にお参りすれば治る程度に考えていたが痛みはひどくなる一方で、四日目にようやく医者に診てもらったとき、医者は膿漏性結膜炎と診断し、手遅れだと言い渡した。

数日の内に左目も冒され、学校に行くことさえできない状態になった。近所のこどもも眼病がうつるからと桂次郎を避けるようになっていった。

治療奉仕団の診察風景

森巻耳との出会い

母つねが亡くなってから半年後に継母が入ってきた。桂次郎の目は右目が失明し、左目がわずかに見える状態であった。桂次郎は、なんとかして視力を回復しようと経文を唱え、仏にすがったが悪くなるばかりであった。

「その目で屋根に登る瓦職人は無理だ。仏に仕えてはどうか」という勧めもあって、奈良油坂の蓮長寺の雲水になった。

寺での生活は、朝四時に始まる厳しいものであり、更につらいことは、弱視の左目だけで、新しい経文を読みこなしていくむずかしさと目が悪いがために受ける仲間からの誹謗であった。

これを感じとった住職は京都盲唖院への入学を勧め、盲唖院では、岐阜聖公会訓盲院の森巻耳氏を紹介した。しかし、訓盲院への入学は家庭の事情で簡単に許されるものではなく、あんま師堀内氏の内弟子となった。師堀内氏は「桂次郎さ、あんまはな、肉体のこりをほぐすばかりでなく、心のこりもほぐす立派な仕事なんじゃ」と心から励ましたにもかかわらず、訓盲院進学の夢は、桂次郎から消

えることがなかった。

桂次郎が姉と二人の兄の援助で訓盲院の入学がかなえられたのは、冷たい伊吹おろしの吹く、翌年の三月であった。

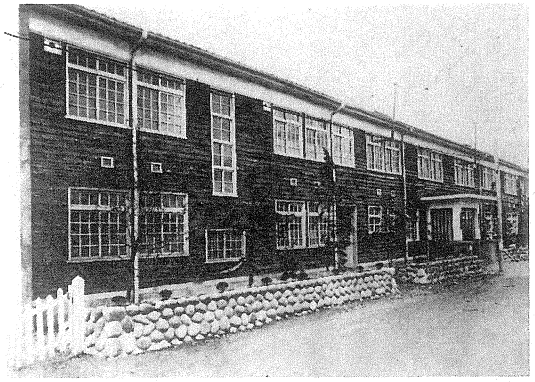
訓盲院の寄宿舎に入った桂次郎に院長森巻耳は「正直に一生懸命努力すれば、神は必ず君をよきようになしたもうものだ。……目が見えなくなっても幸せだったと思うときがきっとくるはずだよ」と激励した。

しかし、兄たちからの学資は直ぐ途絶え、堀内氏のもとで習い覚えたあんまの腕で学資を支えた。その間に左目の手術に成功し、左目で本も読め、字も書けるようになっていった。

こうして訓盲院を卒業した桂次郎は、神戸であんまを開業した。そこへ森巻耳院長から一通の手紙が届いた。

「盲人として一人前に独立していく苦労もいくらかわかったと思う。君のように技術を身につけて仕事のできる人は幸せなのだ。それもできない人がいる。その恵まれない盲人に光を当て、働ける人にまで教育する仕事もまた大切なはずだ。私に協力してくれる教師を待望している。どうか母校に帰ってきて教師になってくれないか」と書かれ、「ぼくの目となって盲人のために一生を尽くそうと決心してくれ」と旅費七円が添えられていた。

恩師が自分に寄せてくれる思いの篤さに感激し、岐阜訓盲院の教師となった。



昭和23年12月に竣工された学校

不幸を幸いと受けとめ

明治三五年、二一歳で岐阜訓盲院の教師になった桂次郎は、森院長の手足となって働き苦しみと喜びを共にした。院長が病死すると後を継ぎ、恩師の志を受け継ぎ、訓盲院の発展と充実に努力した。

他村に目の悪い人がいるときけば、わらじに手弁当で入学を勧誘した。それは県内はおろか、愛知県にまで及んだ。

そして、社会の谷間に落ち込んだかのようにみえる目に障害をもつ児童の教育を正面に押しあげ、幸せにさせようとする信念が、教育振興の面で頑固とも思わせる行動を桂次郎にとらせたこともあった。

この努力で施設も充実し、昭和二年には講堂が竣工した。この折、桂次郎は『盲児の教育は、同情や人情論ではだめで、神に祈りながら愛情を広げていくことだ』と考え『敬神愛人』を自らの信念とした。

この信念を実践するため無医村へ、鍼・灸・あんまの治療奉仕団を組んで出かけ、身をもって『敬神愛人』の心を盲児ににじませようとした。

桂次郎自身も目に障害をもつ人々とともに語り合い、働くことで、胸をはって生きることを教えていった。

しかし、昭和一三年ごろから桂次郎の視力は急に衰え始め、ついに全く見えなくなってしまった。失意の中で桂次郎は

『見えぬこそ　部屋に寝ていて　天高し』

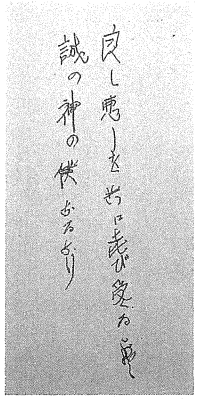
と詠い、更に盲人のため教育に力を入れた。この時代「生きていく上で大切なことは」と尋ねられるといつも、次のように語ったという。

『その一は宗教にほれること、その二は女房にほれること、その三は職業にほれること、この三つさえあれば、人生は楽しい。たとえ身体に障害があっても、その悩みは克服できる』。

これ以後、桂次郎は、ますます盲人の教育に情熱を込め、盲学校が県立に移管されるとともに盲人の福祉をすすめるための岐阜訓盲協会の設立に身を張って尽力した。

やがて戦局は急迫し、昭和二〇年七月九日岐阜市も爆撃にあい、二代かかって築き上げた学校施設は跡形もなく焼失した。焼け跡に残った森巻耳氏の銅像の前に立った桂次郎は、とめどもなく流れ落ちる涙の中で、盲学校の再興こそ「師が私に託された使命だ」と決意し、復興に立ち上がった。

そして昭和二三年校舎本館の竣工がなり、盲児の就学が義務制になって、目に障害をもつ児童の教育は脚光を浴びはじめた。しかし、県下の就学率は全国平均の三七％を少し上回る程度であった。桂次郎は、更に一層、盲人の教育振興のために立ち働いたが、昭和二八年、岐阜盲学校創立六〇年を前にして校長の職を去った。



家族に残した
桂次郎自筆の句

やがて創立六〇周年に招かれた桂次郎は、式典の講演で次のように述べた。

『私のささやかな一生をふり返って、本校に五一年間奉職していたということと、岐阜訓盲協会を設立したという喜びが、せめてもの私一代の置き土産であると、今考えています。これは、私が盲人であったからこそできたのです。一生をふり返ってみて、多少なりとも安心立命の境地にいられるのは、神の愛護があり、信仰生活のおかげです。私は盲人になったことを喜び、盲人で一生を過ごせたことを幸福に感じます』。

光を失ってからの桂次郎は、人を愛することの意味を目に障害をもつ人ばかりでなく家族にも伝えようとした。その一つが、晩年桂次郎によって書かれた次の一句である。

『良し悪しを　共に喜び受くる事
　誠の神の僕なるなり』

深い谷間に落ち込んだような日々をおくる目に障害をもつ幼児や大人に、一筋の光を与えようと懸命に生きた桂次郎の頑固なまでの生き方は『逆境を生かす』にふさわしい厳しく激しい生涯であった。

【参考文献】岐阜盲学校六十年誌
郷土にかがやくひとびと

（岐阜県歴史資料館長　浅野弘光）

教育の経験を町政に生かす

谷津倉寛一

町長時代の谷津倉寛一

文部省指定モデルスクール第一号

富士山の全容を眺める一番よい場所は、東海道線では、富士川の鉄橋を渡る辺りであるという。

JR東海の在来線に乗って、富士駅を出て間もなく、列車は富士川の鉄橋を渡る。渡り終わってやや左にカーブしながら列車は富士川の河川敷を富士川町の駅に向かって走る。その進行方向右手の窓から、富士川の堤の松並木越しに、一目で学校と分かるグランドと鉄筋コンクリートの校舎が見える。今は、日本中どこにでも見られる、何のへんてつもない普通の中学校である。

今から四〇年ほど前のことだが、昭和二三年、ここに木造二階建の新制中学校校舎が、文部省指定モデルスクール第一号として建てられた。富士川町立富士川中学校である。赤い瓦葺きの、颯爽としたいでたちであった。

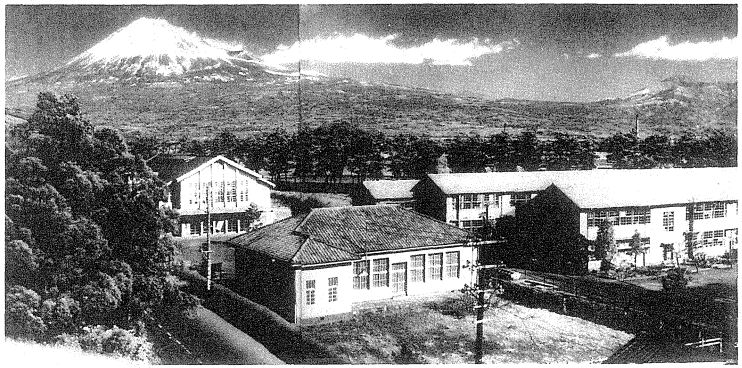
時の富士川町長、谷津倉寛一は、教育に生きる生涯を送った。このことを、富士川中学校建設の話から語り始めようと思う。

昭和二二年、敗戦の痛手はまだ生々しかったが、この年も、占領政策に沿って日本を改革する政策が次々と打ち出された。谷津倉寛一に直接かかわる政策だけでも、四月五日に全国の市区町村長選挙が行われ、それに先立つ三月三一日に、教育基本法、学校教育法が公布された。六・三制の発足である。文部省の心づもりより早く、四月一日から新制中学校を開校しなければならなくなった。

公選第一回町長選挙の候補者に推され、県視学官を辞任して立候補した谷津倉は、町を二分した四月五日の選挙戦に勝ち、町制第一五代町長に就任した。小学校教育の道から転じて自治体の長の地位に就いた谷津倉の前には、解決を迫られている町政の課題が山積していた。まず富士川町に、新制中学校の校舎を建設しなければならない。新制中学校はそれまでの日本にはなかったから、開校したといっても、校舎もなければ先生もそろわなかった。富士川中学校は、とりあえず富士川小学校の八教室を借りて、五月二日開校した。町内に校舎を建てるには、何よりも土地がなければ始まらない。当時は、食糧不足の時代であるから、農地は拡大したい。農地解放で手に入れたばかりの農地を、中学校の校地として提供しようという農民がいるはずもなかった。

そのころ、富士川町に(今もそうであるが)講談社を創設した野間家の別荘「古谿荘」があった。谷津倉は、古谿荘の敷地内にある数千坪の柑橘園の一部を中学校の校地にできないものかと考えた。

町長谷津倉が中学校の校地という趣旨で、野間家とどのような話合いをしたかは分からない。野間家の人がなかなか分かってくれないという嘆きをもらしたこともあったという。



富士川町立富士川中学校　手前に図書館、その富士川側に講堂が見える。

野間家にしてみれば、当時の日本各地の地主たちと同じく、農地改革に際して、判断に迷うことが多かったのも無理はない。繰り返された折衝の中で、野間家は、七〇〇〇坪余の柑橘園を富士川町に寄付する決断を下した。

新制中学校の校舎建設は、日本中の市町村の頭上に重くのしかかる難題であったから、静岡県内においても、その敷地をめぐる問題から町村長の辞任にまで深刻化した紛争だけでも、一六件に及んでいる。それを思うと、町長谷津倉が、緻密な計画とそれに基づく果断な行動力、人を惹きつける温厚な人柄によって、校地を円満に確保した功績がどれほど大きかったか、計り知れないものがある。

校舎建設予定地の確保は、これで終わった。次は経費である。結論からいうと、昭和二二・二三年度第一期工事の工事費総額は、八一八万余円であった。ちなみに、富士川町の世帯数は、一七五〇世帯、総人口九三八〇と統計表にはある。代用食の時代で、生きるのに精一杯の毎日を送る町民に、この負担は重かった。が、大部分の工事費を町費で賄った。町有林を売った。その調査には自ら先頭に立って山深い現地に入った。町内の寄付も求めた。二七町内会を回って、中学校校舎建設の必要性を説いた。資材は、木材、ガラス、釘、セメント等すべて統制されて配給量は少なかった。

これは後日譚であるが、木造校舎を鉄筋コ

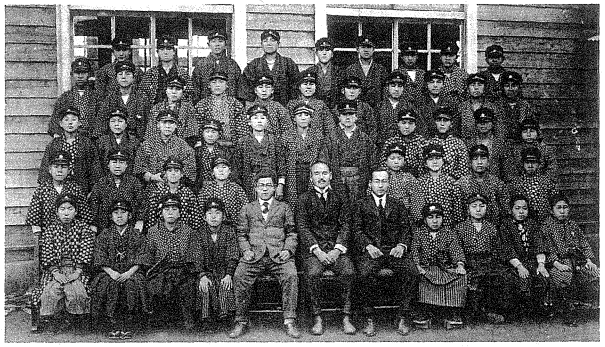
ンクリートに建て替えるとき、よい木が使ってあるので困ったという話がある。建て替えには、木造校舎が危険な状態にあるという老朽率を出さねばならないのだが、兵舎の古材等を持ってきたのと違って、立派な材木を使用してあって、傾くどころかびくともしない。老朽率を出すのに苦心したそうである。教育者谷津倉の心意気が分かる気がする。

一方、新制中学校建設に苦慮していた文部省は、全国の市町村に示す新制中学校建築の規格を作った。それを基準にして全国数箇所に中学校校舎を建て、見本を示そうというのである。町長谷津倉は、富士川中学校をモデル中学校第一号にしようと考えた。昭和二三年一月二三日、文部省が全国に一〇校を選んで指定したモデル中学校第一号に、富士川中学校も入っている。同年一一月一三日落成式が行われた。これで第一期工事は終わる。学校教育の世界にいた谷津倉が、行政手腕をどこで身に付けたか不思議に思うほどである。

ところで、富士川中学校の建設は、この後二・三・四期と続いて、教育者谷津倉の真骨頂は、むしろ、これから後に表れるのだが、それを述べる前に、谷津倉の生い立ちに触れたいと思う。

地域に生きる

谷津倉寛一は、明治三五年一月一二日、富士川町木島字室野に、谷津倉春吉の長男として生まれた。海抜二〇〇m。富士川の急流を眼下に見下ろす急傾斜地に、僅かな段を刻んで家屋が点在する室野より上に、もう集落はない。谷津倉家は、代々室野の篤農家である。



昭和２年３月　富士川尋常高等小学校卒業記念
高等科２年男子　受持　谷津倉寛一（前列右から５番め）
（この生徒たちの中から木島の夜学所に通う青年が出た）

資産家でありながら質素な暮しぶりで、骨身を惜しまず働いた。たとえば、寛一は自転車を室野の直下の集落小山の知人宅に預け、靴を地下足袋に履きかえて、そこから蜜柑の間を縫うようにして三〇分ほど登った。月のない夜は、こんばんぢょうちんで足もとを照らした。町長になってからも、この習慣を変えなかった。

沼津中学を経て静岡師範学校第二部を卒業し、教員の道に入った。昼間は小学校に勤め、夜は、農業補習学校で国語・数学・理科などを教えた。俗称木島夜学所は、一〇畳二間ほどの会所に寺子屋そっくりの机が置かれ、そこに小学校高等科を卒業した青年たちが知識を求めて集まった。土にまみれて働いたその夜のこととて、野良着のままの姿もあった。農に生きる青年の求めに応える仕事が終われば、また段々畑の急坂を登った。麓から雨が吹き上げる夜も、休まなかった。

富士川小学校の教頭時代のことだが、研究授業で一番こわかったのは、谷津倉だったという話がある。授業の滑らかな流れをほめなかった。子どもが、手で、足で考える教室を求めた。君のために言うんだよという話ぶりが温かかったので、核心に切り込む鋭い批評が、かえって尊敬の念を倍加させたという。

生涯教育センター

さて、話を富士川中学校の建設に戻そう。富士川町史に「富士川町立公民館の創設」という見出しで、次の記述がある。「当町では、昭和二十六年町立公民館を建設し、町民を対象とする社会教育機関とし、また条例を定めて福祉増進のために利用する施設とした。」写真と施設一覧表を見ると、これは、当時の最先端の設備を備えた学校の講堂でもある。町史「自治行政」の章、中学校建設第三期工事と同じ施設である。町長谷津倉は、富士川中学校の講堂を学校教育とともに、社会教育の機能を持つ施設として発想した。木島の会所が、村人の集会所と夜学所の機能を併せ持ったように。

翌年、富士川町立図書館が公民館の付属施設として建設された。いうまでもなく、富士川中学校の図書館でもある。こうして、新制中学校の施設を生涯教育センターとしても構想するという、時代を先取りした谷津倉の着想が実現していく。昭和二七年、講和条約の発効を記念し、図書館の落成を祝うとともに、戦後三回目の自治、教育、優良団体等の表彰を行った。町長谷津倉が、教育を学校から社会、さらには将来の日本まで視野に入れて考えているのが分かる。

もう一つ、記しておきたいことがある。それは、富士川中学校の先生たちである。この先生なら、新しい教育を切り開いていけると信頼できる教員を集めた。谷津倉にとって、文部省モデルスクールとは、その施設ばかりでなく、内実でもあった。昭和二五年一一月、時の文部大臣天野貞祐から富士川町長谷津倉寛一に感謝状が贈られている。

町長谷津倉六年間の業績の一部を紹介する。灌漑用水路の新設。これには農林省・日本軽金属株式会社との折衝があった。隣接町長と図った共立蒲原病院設立準備。警察関係官舎建設による治安の確保等。心身ともに休まる暇がなかった。

生まれ育った土地のために、私財を用いることはあっても、折衝に疲れきって富士川町駅に降り立って、我が家までタクシーで帰る無駄遣いをしなかった。心臓の不調に急坂を登る息苦しさを感じたときだけ、役場の吏員が運転する三輪に乗った。

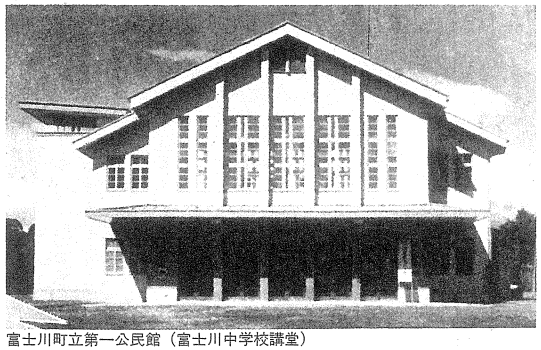
ここに、助役中川国兵が書いた弔辞がある。巻紙に筆で綴った、原稿用紙にして一〇枚の文章である。墨つぎ、筆遣い、中川の谷津倉寛一を惜しむ、情熱的ともいえる真情が、黄ばんだ紙の上にみなぎり走っている。助役をこれほどまでに惹きつけた町長であったのか、町葬の列が山頂まで続いたという話を、私は信じた。

昭和二八年六月一〇日歿
谷津倉寛一　享年五一歳。

（県立教育研修所指導普及部長　河合正直）

第一公民館施設

構造	木造厚型スレート葺２階建　１棟　266坪22（階上　53坪47／階下　217坪75）			
区別／室	位置	坪数	定員	特別器具及び設備
大集会室	１階固定席 ２階観覧席	107坪	614人	固定椅子（１人用）611脚（階下） ２階観覧席　長椅子（４人掛）12脚 舞台　どんちょう　引幕　背景幕 照明一式（第１　ボーダーライト／第２　ボーダーライト／サスペーションライト／フットライト／スポットライト） 拡声装置（電蓄マイク　３本使用） 映写機(35粍１セット２台)暗幕映写幕
和風集会室	２階	14	30	
洋風集会室	２階応接セット付	3	6	
舞台横第一控室	１階東側	45		
〃　第二控室	〃　西側	5.75		
事務室	玄関西側	4.50		
映写室	２階中央	2.25		



富士川町立第一公民館（富士川中学校講堂）

郷土に生きる教育家群像⑯愛知県

「教える教育から育てる教育」へ
郷土教育にかけた実践家
伊奈森太郎

「渥美郡田原町は、渡辺崋山先生の故郷であり、壮烈な最後を遂げた地である。彼は幕末の先覚者で、疲弊した藩政の再建者、偉大な画家、骨太な思想家にして何よりも努力・実践の人であった」と高く評価して、その生い立ち・生き方・業績を知らなかった地元の人々に「偉人渡辺崋山」を教えることに全力を傾け、自らも崋山を手本として生き抜いた信念と行動の人が伊奈森太郎である。

一　「何よりも克己の人たれ」

明治三〇年、田原尋常高等小学校を終えた伊奈は、母校の大久保尋常小学校の雇教員となり教育者としての第一歩を踏み出した。翌々年、同じく母校であった田原尋常高等小学校尋常科の准訓導となったものの、一年でやめた。愛知県第一師範学校で学ぶことにしたのである。一八歳であった。

伊奈はここで、愛知の師範教育を草創期から三三年間にわたって背負った、三浦渡世平に目をかけられる一人となった。彼が入学した当時は、薄給ということもあって教員の社会的地位は高いとはいえず、教師になろうとする者も少なかった。しかも、在学中に起こった教科書疑獄事件で教育に対する県民の信頼が大きく揺れていた時代であった。学校はそのためもあって、誇り高い優秀な教師を育て、社会の信頼を得ることに全力を傾けていた。

教育にすべてを捧げる心、厳しい勉学、師たるにふさわしい人格の陶冶、そのための徹底した克己心の養成が求められていた。その人格の大きさにおいて、その克己の精神において、その気力の充実したふるまい方において三浦を教師の理想像として、伊奈は本科正教員となっていった。

二　郷土教育に全力投球

明治三七年、再び田原尋常高等小学校に戻った伊奈は、五年後二六歳の若さで郡内最大の学校であった同校の校長となり、併設の技芸専修学校長を兼任した。以後退職するまでの二二年間、同校は彼の活躍の舞台であった。

伊奈が最も力を注いだことは、明治三七年から毎月刊行された学校機関誌『家庭と学校』へのかかわりとそこでの執筆活動であった。この雑誌はA5判二〇頁という体裁で、学校から家庭への連絡を主たる目的としたが、卒業生と学校との親密を図り、郷土文化の振興を目指すものでもあった。彼はこの雑誌によって親や地元民までも啓発していった。この『家庭と学校』は現在でも刊行されており、特に伊奈を直接知る五〇代、六〇代の人たちのこの雑誌に寄せる愛着は大きいといわれる。

崋山特集を組んだ『家庭と学校』

伊奈が特に取り組んだのは、郷土教育であった。同誌に「郷土研究欄」を新設して、田原に関係した人物や史蹟の解説紹介を意欲的に進めた。中でも地元の人たちに疎遠な存在でしかなかった渡辺崋山を、町民の模範的人物として繰り返し取り上げ、「郷土の偉人」として偶像化させていった。

伊奈は小学校長としての活躍のほかにも、「田原町立通俗図書館」を実現させ、その初代館長となり、大正七年には町立中部実業補習学校の訓導兼校長として、翌八年には田原中部処女会を発足させ、既にあった町青年会と両立させて指導にあたるなど社会教育の振興にもめざましい活躍をみせた。昭和三年には、多年にわたる社会教育への貢献が認められて、文部大臣より表彰を受けた。

三　終生の師・岡田との再会

伊奈にとって、同郷の先輩でもあった岡田虎二郎の影響力は非常に大きかった。岡田は明治末期から大正にかけて静座の指導者として全国に知られ、大正九年その死とともにこつぜんと忘れ去られた人である。『現代日本の思想』（岩波新書）は、「この岡田という人は

日本の近代思想史の上で独自の思想運動をおこした人で、そのあたえた影響は広くかつ深い。ノン・ディレクティヴ・カウンセリングとして一九五〇年以後のアメリカ心理学に出現する傾向と同一である」と紹介している。

伊奈が久しぶりに岡田に会ったのは、校長になった翌年の正月であった。そこで彼は同席した町の有力者たちの面前で、いきなり「伊奈は相変わらず青瓢箪だな、修養には三段階あるが一番下は頭を主とする者であり、この伊奈のごときがそれである。伊奈は師範学校を優等で卒業し若くして校長に抜てきせられ、自分には偉いつもりで居るであろうが、概念的に知識を注ぎ込むことばかりしている。こういう修養は頭ばかり大きくなって倒れやすい不安定な人間になる」と厳しい愛の言葉をぶつけられたのである。

伊奈はのちに、この岡田こそが自分を校長に推した人であることを聞く。このことをきっかけに彼は従来の教育観を大きく飛躍させ、人間的にも一段と成長を遂げていった。岡田の一言一句を反芻しながら、「知識万能の注入主義」を克服し、「教育の根本は愛である」とし、「愛の教育はいかなる人間であろうとも化することができる」との信念に立ち、「偉大な教育者とは自ら真人となって、その人格が人をぐんぐん引きつけて、子弟が自ら薫陶開発されていくような教師」を目指したのである。

伊奈が校長時代の田原中部小学校風景

点数だけで人の優劣を判断することは人の一生を誤らせる教育だとして、「採点亡国論」なる論文を東京の「学術評論」に投稿して入選したのもこのころであった。また、校長としての晩年には、優等生の表彰を廃し、長期に及ぶ欠席以外には落第者を出すことをやめ、卒業生全員に記念品を贈るように改めていった。

世界的な不況の中で、田原町でも教員の減給問題が持ち上がった。教員の生活は決して楽ではなく、彼等は強く反発した。郡の校長会長として、事態解決の矢面に立った伊奈は、町当局が月給不払いに出たとき、自分の貯金すべてを引き出して部下教員に貸与することになった。心配された事態とはなったが、県の介入でこれを和解することができた。これを機に校長を辞した伊奈は、この時四八歳であった。彼の脳裏を、いずれも四九歳で生涯を終えた崖山と岡田のことがかすめていた。

師範学校で身につけた、教育に全身全霊を注ぎこむ生きざまと、岡田を通して得られた当時の日本における最高水準の知性をもって臨んだ伊奈の教師生活は、昭和六年をもって終わる。

四　再び執筆活動へ

辞任した一か月後、愛知県教育会の教育史編纂員の職を得た伊奈は、住居も名古屋に移した。本格的に資料収集に取りかかるとともに、その成果を教育会機関誌「愛知教育」に「郷土資料をあさりて」と題して連載していった。しかし、教育史編纂は、憂うべき時局の嵐の中で中断を余儀なくされたのである。

昭和一一年、愛知県教育会主事となった伊奈は「愛知教育」の編集発行人となった。岡田によって深められた教育観・教育信念を、今度は全県の教師に向かって思う存分に発表する場を得たのである。それまでに続いて、「郷土資料」と題した研究成果を書く一方で、毎号の巻頭言を執筆した。「教える教育から育てる教育」への発想の転換を訴え、「知識万能の教育観」を戒め、「実行の大切さ」を説き続けた。しかし、戦時色にぬりつぶされていく世相の中で、伊奈の書くこともまた時の流れにそったものとなっていった。

二〇年一一月の巻頭言に「教育は観念の注入ではなくて神性の開発であらねばならぬ。在来の観念教育に堕した学校教育は、統制的な竪に通した組織は立派に出来ていたが横に見た民本的の教養たる個人の力については一歩手前に重要なるもののあることを忘れていた。個人の神性開発によって真の人間を完成し、道義によった大和太平の社会を作って、以って皇室を中心として武装なき真文化国家たる日本国を再建すべしである」と書き、反省の表明と将来への展望を述べたのである。ときに、六二歳、この年四月には既に教育会主事を辞していた。

生徒に囲まれた伊奈校長（大正10年）

五　郷土史家としての最後の人生

伊奈はその後、県の内政部教学課主事として、史蹟名勝や国宝重要美術品に関する事務を担当し、そこを辞した後は、県の文化財調査委員として、戦争によって失われた県内の文化財の整理、新しい登録事務をまとめていった。

また、二一年からは月刊個人雑誌『うぶすな』を発行し、戦後の退廃沈滞した人々を励し、静座による心身の開発、郷土民俗の研究、和歌の練成にも心を注ぎ続けた。

昭和三四年、倦むことなく働いた伊奈は、三回目の文部大臣表彰を受けた。この時既に病を得ていた彼は、二年後の昭和三六年七八歳で没した。

本稿の執筆に際して、愛知県立時習館高校の別所興一氏の援助が大きかった。氏の研究成果を随所に使わせてもらった。他に、『伊奈森太郎先生遺稿抄』『愛知県教育史』『田原町史』『三浦波世平伝』を参考にした。

（愛知県教育センター経営方法研究室長　影山宣洋）

郷土に生きる教育家群像㊷三重県

義務教育の功労者
義務教育費国庫負担制度改正の道を開く
大瀬東作

すい星のごとく

大瀬東作は、三重県度会郡旧七保村野原の人である。明治一八年（一八八五）一一月、大瀬平作の長男として生まれた。この七保村は、その隣の滝原町と昭和三年九月に合併して、現在は大宮町となっているが、合併前は人口わずか三四〇〇人、しかも交通不便な山村へき地であった。大瀬家は、代々家業の農業を営みながら、庄屋をつとめた。東作は、旧制中学を卒業するや、父の意見に従って、直ちに家業に就きながら、独学をつづけた。彼は大の読書家で、読書を通じて中央の学者とも文通、交際するほどであった。彼の学識と才幹は、早くから村民に知られ、大正四年に推されて村の助役となり、次いで七年、三四歳で村長になった。

この寒村の、しかも無名の村長、大瀬東作が、翌大正八年（一九一九）、小学校教員俸給問題の解決のために、義務教育費国庫負担制度改正運動を起こし、以後三年間、全国町村長の先頭に立ち、その目的達成のため命を懸けたのである。そして事成るや、淡々として田園に帰った。まさにすい星のごとく現れ、去ることもまたすい星のごとしであった。

小学校教員俸給問題

我が国の義務教育制度が、明治一九年森有礼文部大臣のとき発足して以来、義務教育は市町村の事業として定められ、それに従事する小学校教員の俸給は、市町村の負担になっていた。義務教育が進むにつれ、教員数は増加しつづけ、したがってその俸給費も年々増加し、そのために市町村の教育費はだんだん膨張していった。

大瀬が村長になった大正七年は、ちょうど第一次世界大戦の後で、経済界は大変動を起こし、物価は暴騰に次ぐ暴騰を重ねたため、これに対応して小学校教員の俸給も、増給に増給を余儀なくされた。したがって町村の教育費はますます膨張して、そのため財政は極度に圧迫され、極端な財政難に陥った。貧弱な町村の中には、遂に教員俸給の支払いを遅延したり、あるいは当然なすべき増俸も、やむなく中止するところも所々に現れた。

他方、小学校教員は、こうした相次ぐ増俸にもかかわらず、その生活を安定することは困難であった。中には生活難のため、教員を辞めて実業界に去る者も少なくなかった。町村の財政苦悶もさることながら、教育もまさに危機に立ったのである。

大瀬東作の胸像

政府は、かねてから多少の補助金は出していたが、大瀬が村長になった大正七年、この危機に対処して新たに市町村義務教育費国庫負担法を定めて、毎年一〇〇〇万円を市町村教育費の補助として支弁することにした。その後も市町村の負担する教育費は、年々膨張していったが、この支弁額は変わらず、町村の窮状は、深まるばかりであった。

大瀬は、村長となって、この苦境に立たされた。しかし教育に特に深い関心をもつ彼の目は、待遇に恵まれぬ小学校教員に向けられ「彼らは衣食の資にすらも窮し、平素式服を着て、教壇に立つ悲惨」（大瀬の手記）をなめているとして、深く同情し、教育者救済のためにも、事態の打開を計らねばならないと、その方策について真剣に考えた。そして彼の得た結論は、小学校教員俸給費に係る市町村の負担分を国庫負担に切り替えることであった。

大瀬、問題解決にたつ

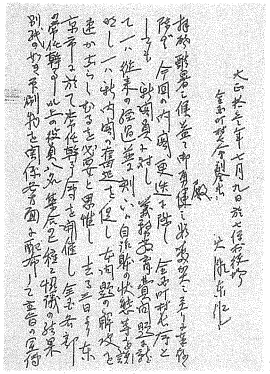
大正八年（一九一九）六月、度会郡長は郡内町村長を召集して、当面の物価高騰に対応して、郡内の教員に一律五割の増俸をするよ

う指示した。これに対し町村長は、財源の枯渇を理由に増俸は困難だとして、会議は停頓してしまった。このとき、末席にいた大瀬は、一郡長を責めても詮なしとして「この問題は、われわれ町村長の力で解決する」と断言するに至った。大瀬は自分の発言に、大いに責任を感じ、その場で町村長一同に謝るとともに、意を決して今後のことは自分に任せてほしいと、大胆な提言をした。大瀬が教員俸給費国庫負担制度の改正運動を決意したのは、このときであった。時に三五歳であった。

運動の展開

小学校教員俸給の国庫負担制度の改正を、との運動は、それ以前から、教育界からも起こされていたが、いずれも成功しなかった。そこで大瀬は、この大事業は、なんとしても全国の町村長が団結して、強力な政治力をもって当たらねばならないと考えた。だが当時はまだ町村長会の組織はできていなかった。まず自ら奔走努力して、三重県町村長会を結成し、次いで他府県に呼びかけて、全国町村会の結成に向かって努力した。彼は若年、かつ新米の村長にもかかわらず、三重県町村長会の副会長に推されていたが、自村七保村役場を全国町村長会の創立準備事務所として、活発な活動をした。当時、村役場の職員は村長大瀬のほかはわずか六名。大瀬は村政事務に支障ない限り、極力運動の推進に当たった。彼は国庫負担制度の改正に関する政府、帝国議会等への請願書や陳情書等もほとんど自ら執筆し、ときには県内外への連絡のため、鉄筆を振るって謄写のガリ版まで作った。他方、創立準備や陳情のために、いくたびか東京との往復をくり返し、あるときは遠く北海道あたりまで講演に出るなど、東奔西走、休む暇はなかった。

こうして、運動発足後、約一年半、大正一〇年（一九二一）二月、努力の末遂に全国町村長会（現在の「全国町村会」の前身）を結成したのであった。そしてここでもまた、その副会長となり、事実上、町村会運営の主宰者となった。彼はいよいよ宿望の全国町村長会、という強大な組織を擁して、本願の小学校教員俸給問題の解決に向かって、義務教育費国庫負担制度改正運動を推進したのである。

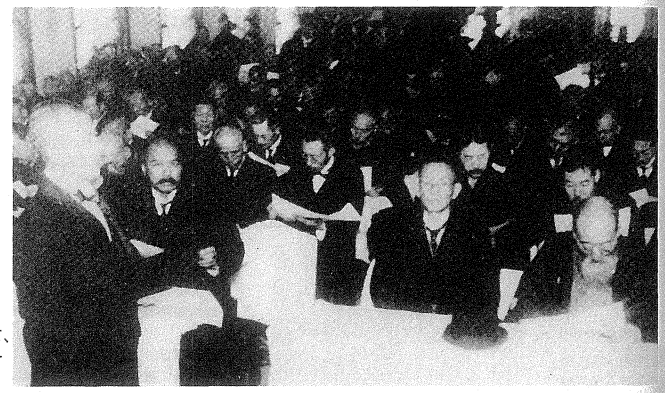


大瀬東作が自ら鉄筆を振った通知文

運動遂に効を奏す

大瀬の運動の究極目的は、小学校教員俸給の全額国庫負担であった。すなわち、義務教育は本来国家の事業であるべきで、したがって少くともその教員俸給費のみは、全額国が負担するのが当然であるとした。しかし、国の財政事情からみて、これを一挙に実現することは困難と考え、まず差し当たり、既定の義務教育費国庫負担法を改正して、俸給費総額（当時約一億円に達していた）の二分の一、五〇〇〇万円を支弁させることを目標にした。大瀬は周到な計画の下に、広く教育諸団体とも連絡協調して、政府・政党各方面に陳情・請願を重ねるとともに、世論の高揚を計るため、講演、演説会等に自らも出席登壇して熱弁をふるうなど、奮闘をつづけたがなかなか実現の目途が立たない。政府は原敬内閣から、高橋是清内閣へと移るが、容易に国庫負担増額の予算は計上されぬばかりか、途中、原内閣は一時、義務教育費節約案を出して、かえって大瀬らの運動を阻むなど、紆余曲折、運動は難航した。が、大正一一年六月、運動を開始してから三年目、幸いにも加藤友三郎軍縮内閣の出現によって、軍備費の削減による余剰金を、待望の小学校教員俸給費増額の財源に確保させることができた。

すなわち市町村義務教育費国庫負担法改正（大正一二年三月、法律第二〇号）がそれである。



全国町村長会創立の総会において、義務教育費国庫負担運動の推進を宣言する大瀬東作（左端起立）

事成って、大瀬田園に帰る

しかし改正法による負担額は、四〇〇〇万円であって当初の目標には達しなかったが、大瀬の本願たる小学校教員俸給の全額国庫負担の思想は、今や不動の世論となっていた。大瀬は近い将来に、全額国庫負担実現の道が開かれることを感じ、内心満足するところがあった。彼は我が事成れりと、法律公布を前にして全国町村長会の副会長を辞し、次いで七保村長をも辞して、淡々として田園に帰った。まだ三九歳であった。

郷里に引退した彼は、その才幹を惜しまれて、たびたび政界への進出を薦められたが、いっさい固辞して受けず、あくまで一村夫子として農業の増産開発、あるいは道路、架橋の工事を起こすなど、郷土発展のために余生を捧げた。昭和一三年三月（一九三八）急病で、こつ然として逝く。

大瀬の没後二年、昭和一五年には地方財政制度の全面的改正により、小学校教員の俸給費は、市町村負担から都道府県負担に移されるとともに、旧法である義務教育費国庫負担法が制定され、二分の一という定率による国庫負担が実現した。その後、幾多の変遷を経て、昭和二八年に新しい義務教育費国庫負担法が施行されて、現在に至っている。

現在、彼の郷里、旧七保村の野原橋のたもとに、端然として立つ大瀬東作の胸像は、その偉業を永遠に記念するものである。

（元三重県教育委員長　佐々木仁三郎）

●参考書
『三重県教育史第三巻』
佐々木仁三郎著『大瀬東作伝』

郷土に生きる教育家群像 ⑦ 滋賀県

聾教育にすべてを棒げた 西川吉之助

西川吉之助・はま子の肖像

西川先生記念像（昭和47年7月完成）

滋賀県立聾話学校の玄関わきに、やさしくほほえみながら語りかける父親と、その口もとを、じっと見上げる幼女の像が建っている。

聾話学校の創始者で、生涯を聴覚障害児の教育に棒げつくし、聾者の父と仰がれた西川吉之助とその娘、はま子の父子像である。

一、吉之助の生い立ち

吉之助は明治七年に滋賀県蒲生郡八幡町（現近江八幡市）の豪商の家に生まれ、のちに、その親戚である西川伝右衛門家を継いだ。

西川家は、北海道オシヨロで盛大に漁業を営み、また八幡銀行（滋賀銀行前身）を創始するなど事業家として著名であった。吉之助の生家は蚊帳等を扱う商家であったが、その実祖父は国学者としても知られ、その影響を強く受けたことが、後日、教育者としての道を選ばせる素因となっていたのかも知れない。

二、実業家としてアメリカに渡る

明治四〇年、吉之助は家業を義父にまかせてアメリカに渡り、サンフランシスコで雑貨を商い、日本手工業品を彼の地に紹介するなど実業家として活躍し、九年にわたる滞米生活のすえ、大正四年に帰国した。そして、その翌年、第三女はま子が誕生した。吉之助四三歳であった。

三、わが子が聾であることを知る

はま子が聾であると診断されたのは、大正八年京都府立医大耳鼻科においてであった。失意の底からようやく立ち直った吉之助の苦闘がその日から始まった。

四、口話法を知る

当時の聾教育は、そのほとんどが手話法であり、生徒たちは、奇声をあげながら身振りをつかい、手指を動かして話し合っていた。

吉之助にはそれが奇異に感じられ、どうしても意に合わず、何か他に方法はないものかと各所を歴訪し、ついに京都市立盲唖院の教頭岡正文の教示により「ボルタ・レビュー」というアメリカの聾教育専門誌に接することができた。そしてはじめて吉之助は、相手の口唇の動きを見てその言葉の意味を知る「読話」のことを知った。

彼は、この方法以外に、はま子に対する教育法はないと信じ、口話法による教育に専念することになった。

これは、我が国最初の口話学校である私立日本聾話学校が、ライシャワー夫妻により、東京に開設される前年のことであった。

五、口話法教育を私費で始める

吉之助は家人に、「この子は聞こえないと思うな。子守歌も止めるな。音の出る玩具を与えよ。そして普通に話しかけよ。」ときびしく言いつけた。

ライト・オーラル・スクールの通信講義録を苦労して入手し、その効果的な方法を、吉之助が私費で編集発行する「口話式聾教育」に取り入れ、広く聾児をもつ親に知らせたいと考えた。

このように、わが子はま子に対しての教育は、依頼されれば他人の子にも及び、「西川聾口話研究所」が自宅において自費により開設されることになったのである。

六、口話法の普及につとめる

文部省による欧米派遣より帰朝した東京聾唖学校の川本宇之助と、名古屋市立盲唖学校の橋村徳一を知り、たちまち三人は意気投合し、口話教育の普及を誓い合った。

大正一四年一月、名古屋で口話法講習会が開かれ、三人は機関誌発行を相談し、吉之助の手で創刊されることになった。

また同年七月には、同じく名古屋で開催された文部省主催の「聾教育口話法講習会」では、吉之助は講演につづき、九歳のはま子と壇上において口話の実演を行い、会場は感銘の拍手が鳴り止まなかった。

このように吉之助は、積極的に口話法を説き、時が許せば労苦や経費をいとわず、はま子をつれて全国で講演・実演を行った。

七、県立聾話学校を創立する

特に昭和二年に滋賀県において、聾学校の建設の気運が高まるや、その実現のため、はま子をはじめ、聾児数名を伴い、県会議事堂を訪れ、口話法の実習を議員の面前で行った。幼児が、先生の口もとを見て読話し、一つひとつ質問に答える様子に議員は感動し、涙する者も多かったという。

議案は満場一致で可決され、滋賀県立聾話学校は西川吉之助の尽力によって、その創設が認可されたのである。

八、吉之助の教育観

吉之助は、聾唖者は耳が聞こえないから、ものが言えないだけで、一般の人と何ら異なる

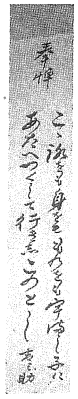
ところはないと信じた。この点では手話法による人々と見解の相違はない。

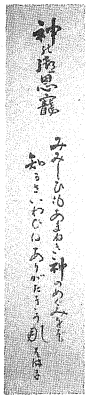
しかし吉之助は異常とさえ思えるほどに口話法に執着した。

聾唖者のほとんどが発声器官に異常のないところから、口話法によって、耳のかわりに目で読話し、訓練を繰り返して正しい音声を作り出し、世人から、障害のないものとして扱われることを望んだ。そのための研究・実践のためには私財を惜しみなく費やした。

手話や身振りにたよれば、読話能力は育たず、残聴力の活用に支障を来し、ついには全聾に近くなると訴え、そのため手話や身振りは完全に禁止しなければならないと信じたのである。

また一方、家庭教育の重要性について、子どもたちの言語教育を学校にのみまかせることなく、母親を中心とした家庭での教育が、いかに言語獲得のうえで重要であるかを説いた。


（吉之助の遺詠）


（はま子の遺詠）

当時は盲唖学校・聾唖学校と呼称するものが多かった。彼は昭和三年に初代校長事務取扱に就任したが、滋賀県では聾話学校と名づけた。これは公立学校では滋賀県のみであり、いかに吉之助の口話教育への思いが強く深いものであったかがうかがわれる。

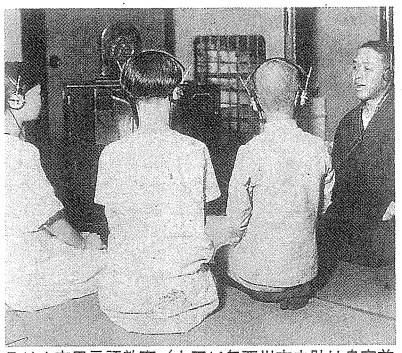
九、教育にすべてを注ぎ込む

吉之助は家財私費を惜しげもなく学校に注ぎ込んだ。教員の研修費・出張旅費・定数外教員の報酬も彼のポケットから出されたようである。

昭和七年ごろ、子どもたちの保護者や教職員の間から、創始者吉之助の銅像をつくり、その功績と労に報いようとの発議があり、建設委員まで選出された。その当時の保護者の一人であった岡ひでは、

「先生がそのことを聞かれて、皆さんの厚意は有り難いが、そんなお金があるのなら子どもたちのために使って下さい。印刷機でも購入して技術を身につけさせて社会に役立たせたいと思います。と言われ、私たちは涙を流して先生の徳を慕った。」と述べている。

岡ひでの息子猪三郎は、聾話学校を卒業し、聴覚障害を克服して教職につき、現在滋賀県立聾話学校印刷科主任として、よくその職責を果たしている。


ラジオ応用言語教育（大正14年西川吉之助は自宅前に「西川聾口話教育研究所」を開いた）

一〇、家業衰え、家屋敷を処分

豪商といわれた西川家も、家業の北海道のニシン漁の不漁つづきで急速に衰微し、家計もままならぬ状況にまで陥っていた。

そして昭和一一年、親族会議の結果、永年住みなれた、八幡仲屋町の家屋敷を処分して聾話学校の校門前、草津町大路井の借家に移った。知人に転居を知らせる手紙に、その借家を「啀唔軒」と名づけたことを記している。読書の声を意味するもののようである。

転居後の吉之助は、心機一転して心を落ち着けて校務に専念した。

昭和一二年には、ヘレン・ケラー女史の来朝を迎え、一柳満喜子、はま子とともに親しく面会した。しかし平安な日々は長くは続かなかった。あいつぐ家族の不幸に吉之助自身もひどい神経性黄疸を病み、一時は危篤の状態になったがよく養生の甲斐あり小康を得た。しかし彼の体力・気力は急速に衰えた。

一一、逝く

昭和一五年七月一八日午前二時三〇分、吉之助は突然この世を去った。六六年の生涯であった。

こころをも　身をも　ものをも
うまし子に
あたへつくして　行きし　このとし

吉之助の辞世の一首である。

その報を聞いた生徒・職員・保護者はぼう然自失し、しばらくは言葉もなかったが、やがてすすり泣きの声は慟哭の嵐に変わった。

同年七月二三日、炎暑の校庭で、校葬が執り行われ、吉之助の遺徳を慕ぶ人々は全国各地から参列し、供花花環は校庭を埋めた。

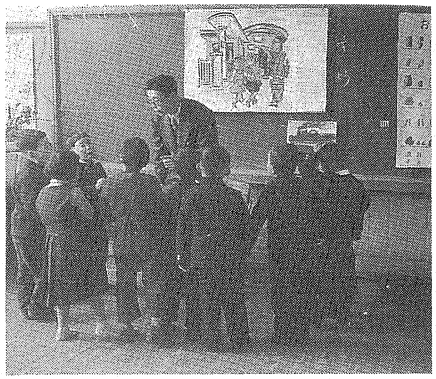
のちの校長山口薩記は、積み重ねられた遺品を整理した。外国からとり寄せた原書、彼自身の研究記録、日常使用品等おびただしいものであった。近畿地区聾学校長会の発案もあり、全国的に協力を得て、昭和三四年に校地の隣接地に「西川吉之助先生記念図書館」が建設された。

昭和四五年、草津から栗東町に校舎が移転し、記念図書館は滋賀県聾唖者福祉会館として使用されることになり、図書類は新築の学校図書館に移され現在に至っている。そして今なお、聾教育の貴重な資料として尊重されている。

吉之助がすべてを捧げた草津の学校は聾唖会館のみがわずかにその名残りを示すのみで、周辺はすべて近代的建物にうめつくされ、当時を語るものはない。

昭和六三年、吉之助の手によって創められた聾話学校は創立六〇周年を迎えた。

吉之助の教育方法は、時の流れとともに工夫改善されたが、基本的には彼の建学の精神は受け継がれ、この偉大なる聾教育の先人は常に私たちの心の灯となっている。


口話指導

昭和３年５月創立当時の校舎（郡農会養蚕室を仮校舎とした）

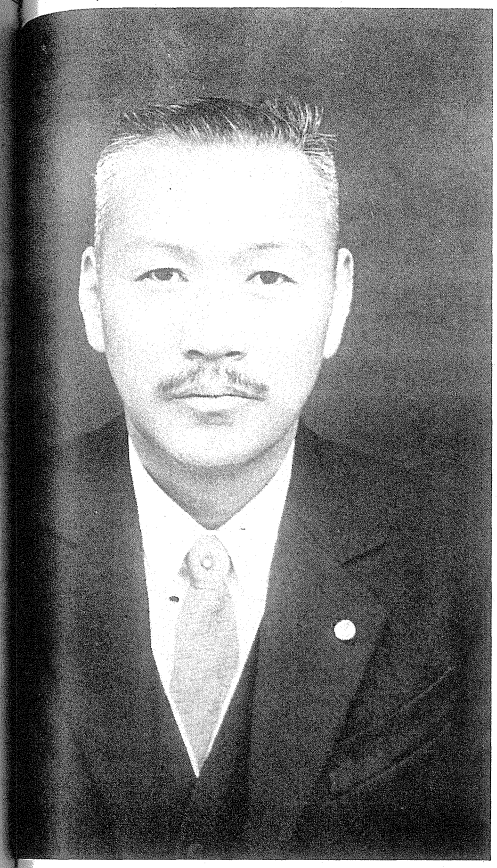
参考文献
○口話教育の父　高山弘房
○卒業論文（京都府立大）　堤　君代
○西川はま子集　ろう教育科学会
○創立二〇・四〇・六〇年誌　滋賀県立聾話学校

（滋賀県立聾話学校長　福井義治）

郷土に生きる教育家群像㉛京都府

いとし子を胸に、教職に殉じた

阪根治三郎



昭和九年九月二一日、室戸台風は京都を直撃、未曽有の惨事をもたらした。

この台風で、八幡町（今の八幡市）立八幡小学校の校舎が倒壊、数多くの死者を出した。校長・阪根治三郎氏もその中の一人である。

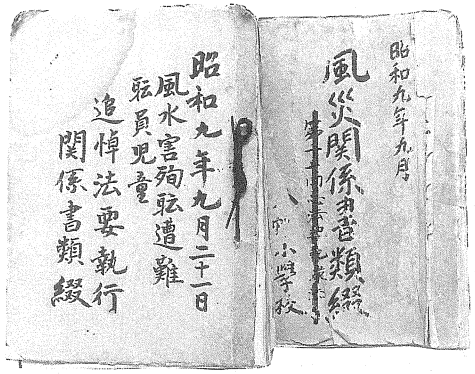
篤学の士としての道

阪根治三郎は、明治一九年五月京都府北部に位置する山家村（今の綾部市）に生まれ、明治四〇年京都府師範学校を卒業した後、郷里近くの小学校で訓導として教育の道を極め、大正九年三五歳にして山家村立西八田小学校長に抜擢された。ついで、大正一三年郷里の小学校に栄転し、以来九年間同校で実績を上げ、昭和七年奏任官待遇の恩命に浴し、昭和八年更に抜擢されて、八幡町立八幡小学校（当時、二八学級・児童数一三〇〇名）の校長として転じたのである。以来、校区の信望を博し、教育の内容と校舎の設備の両方面の充実進展に着々として功を奏し、将来を期待されていたのである。資性温厚にして寡言であるが、実行力に富み、責任感が極めて強く、またすこぶる篤学の士でもあったのである。

かつて、阪根治三郎が山家村立山家小学校長のとき本府において第一回初等教育研究発表会が開かれた際、「わが校の宗教的教育」という巨編を寄せてみごと第一席に入選したのである。そのことが次のように風災記録に残されている。

『白熱せる教育精神と精到なる実際施設とを発表し、多年黙々として蘊蓄累積し来りたる所を提供して、府下の初等教育界に多大の感銘を与えた事がある。又「山家村誌」等を編述して郷土に適応せる教育を行った。

八幡校に於てもこれから益々なす所あらんとして、この不慮の天災に遭い、その職に殉じたるは洵に痛ましい極みである。この教育者としての尊い最期こそ、図らずも前記「わが校の宗教的教育」の偉大なる結論となったのである』



風災関係書類

沈着にして寛容な校長

その朝（昭和九年九月二一日）阪根治三郎は午前七時二〇分に出勤した。始業時刻は八時三〇分であるが阪根校長はいつもこの時刻に出勤するのが例であった。校長室に入り、雨に濡れた上衣を脱いで、それを柱に掛けていると角田訓導が、「ただ今、川口（地域名）から電話がありまして、女子児童の登校困難ですが――とのことですから、風のこやみになるまで登校を見合わせよと返事をしておきました」と報告にきた。沈着にして寛容な阪根校長は大きくうなずきながら

「それで結構」とただひと言。

そのころから風はせつなせつなに激しくなった。ヒューッと虚空にうなりをたてた。

阪根校長の眉がにわかに曇ったかと思うと、彼は直ちに隣の職員室に現れた。そのころ職員室にはもうほとんど全部の教員は出勤し、既に担任の教室に出ている者もあった。

「大変な風になったから、各担任は部署につきなさい」

阪根校長は命令を下した。教員は各々担任の教室に赴き、それぞれ臨機の処置を講じた。台風の来る方向――南に面した窓は、ガラスが割れたり、雨が降り込んだりするので、机

を北側に寄せ次々と登校してくる児童を廊下に出させた。

この学校には、台風の襲いくる方向にぬっと突き出た二階建ての一棟がある（一〇教室・収容児童約五〇〇名）。この一棟は全校舎の風垣となるような位置にあり、校舎は建築後日も浅く、来月には落成式が挙げられる予定になっていた。この一棟とこれに続く旧校舎の教室にいた教員は、刻一刻と危険の迫るのを直覚して、「早く講堂に避難せよ」と受け持ちの児童に命令した。

阪根校長は、風当たりの強いこの一棟に神経を集中した。もうじっとしてはいられない。校長自らいつもの泰然たる態度に似ず、足早にこの一棟の各教室を巡り、

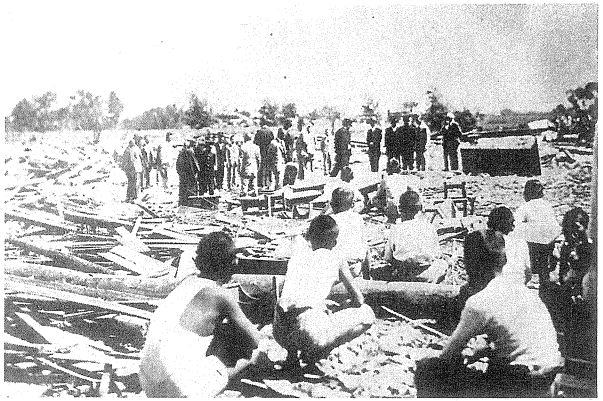
「講堂へ、講堂へ。早く、早く」とせきたてた。

「大分危険になってきた。とにかく二階から下の廊下へおろして避難させよう」。

こう独り言を言いながら、中央階段を二階へ駆け上がって行った。

「早く下りて講堂に避難せよ」

と、叫びながら、各教室の前を西から東へと小走りに走って行った。こうして東の階段を半ば降りた瞬間、奈落も崩れよとばかりの一大音響とともに、俄然この一棟は倒壊し、大きな梁が阪根校長の頭部に墜落して、校長はその下敷きになってしまったのである。



倒壊現場

あそこに校長先生がおいでになる

下敷きになった児童を救い出す者、急を消防組等に告げる者、負傷者の手当てをする者。すべての教員はそれぞれ必死になって活動した。倒壊した校舎の天井を破って、児童は次々に救い出された。かすり傷一つしていない児童も多かった、軽傷の者、重傷の者、嗚呼何という惨事であろう。既に呼吸も絶え果て、血潮に染まっている者も次々掘り出された。安井訓導も下敷きとなっていた。救い出そうとすると、

「自分のことは構わない。早く児童を救ってやってください。児童を、児童を」

と言って制するのであった。奈古訓導も掘り出された一人で、身には重傷を負いながらも躍起になって児童の救援に努めた。そのうち消防組の人たちも駆けつけて救助した。高等科生徒の働きは実に目ざましかった。

「あそこに校長先生がおいでになる」

という声がした。どうか生きていてくださればよいがと、すべての人々は皆念願した。傷らしいものは見られなかった。しかし既にこと切れていた。校長の体を動かすと、彼は胸に一人の児童を堅く抱きしめていた。その児童ももう呼吸は止まっていた。この幼い児童

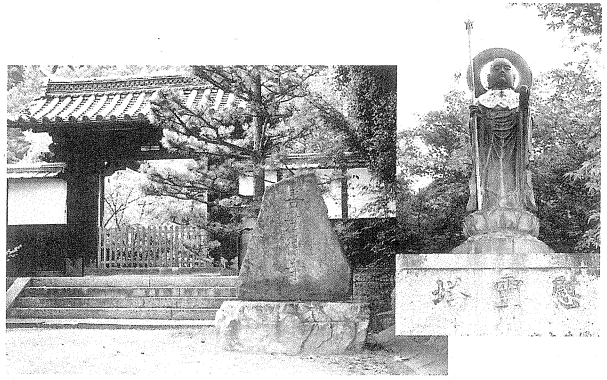
を抱いていた校長の遺体を取り囲んで、すべての人は、声を放って慟哭した。

〝聖職の碑〟は語る

八幡小学校のすぐ近くに、名刹善法律寺がある。境内には紅葉の木が多いことから、児童たちは紅葉寺と呼ぶ。みごとな階層式庭園の一隅に、一基の柔和な地蔵尊の碑が建っている。この碑が、昭和九年の室戸台風で亡くなった三二名の児童と、阪根校長を祀る慰霊塔である。やさしいまな差しの地蔵尊の立像の下に「慰霊塔」と大きく刻まれ、阪根校長を囲むかのように三二名の児童名が碑面に刻まれている。

命の瀬戸際に立った児童たちが叫んだであろう「先生！助けて！」の一語、天にも地にも救ってくれるのは「先生」だけ。その言葉が教師の肺腑を突く。「先生がきたから大丈夫だ！」あらん限りの声と力を出し切って、阿修羅の働きを見せる先生。教師とはさもあろう、いや人間としてそうであろう。

三二名の児童と、阪根校長を祀るこの碑は、当時の状況を後の世に語りかけながら、重く、大きく「教師とは何か」「教育とは……」を教え諭してくれる語りべの碑として、今も手厚い心配りの中で地域に生きている。



善法律寺山門と地蔵尊

阪根校長の履歴書は『昭和九年九月二一日、室戸台風ニテ八幡小学校校舎倒壊ノ際下敷トナリ頭蓋骨破砕即死』と記されて終わっている。そのとき、四八歳だった彼は、次第に強まる風雨をついて出勤したとき、そこに思わぬ不幸が待ち受けていようとはだれが予想したであろうか。

風は勢いを増し（風速六〇m）トタンは吹きまくられ、窓ガラスは飛び、木は根から引き抜かれ、瓦は剝ぎとられて飛んでいく。子どもたちの泣き叫ぶ声、まさに阿鼻叫喚の地獄であったに違いない。そのとき新校舎の方からもうもうと砂煙が立って、東の校庭はみるみるうちに煙に包まれていく。

こんな状況の中で、子どもを抱きしめ、子どもを守りきろうとした阪根校長の心を支えたものは一体何であったのだろうか。たくさんの子どもの命を守るため、死と対決して陣頭指揮した透明なまでの心は、子どもの上にのみあったということではないだろうか。

決して死をたたえようとは思わない。むしろ命こそ何ものにもかえがたい大切なものである。しかし、このような人生があるのもまた、事実である。今、阪根治三郎氏の殉職の意味をじっくり考えたいものである。

注　事実は八幡小学校『風災関係書類』、京都府『嗚呼殉職四訓導』の冊子による。

（前京都府総合教育センター所長　中　正文）

郷土に生きる教育家群像㉓大阪府

口話教育に生涯をかけて

加藤亨

聾口話学校の創設

大正一五年（一九二六）三月一四日は、大阪における口話法による聾学校創設の第一歩を記念すべき日であった。それは、大阪医科大学教授、加藤亨博士の「聾の子どもの口話教育」のラジオ放送で、当時の記録には次のように示されている。

『水都三〇〇万市民のラジオファンは、JOBKのマイクに乗った音波の流れ出すや否や、一斉に声を呑み、一語一語好奇心と興味にそそられ、加藤博士の講演に耳を傾けたのである。あるいは医学の見地から悟すが如く、あるいは人道に立脚して訴えるが如く、鉄火の如き声は実に力強く、聴く者の胸にひしひしと食い入ったのである。

この講演とあいまって、聾の子どもがゆるやかな口調で新聞記事や日記を読み、童話の朗読をし、また、対談に応じるなどしたため、聾の子どもは話すことができないものと信じ切っていた人たちに驚異を与え、嘆賞の声をもらし、放送局内の人たちも、この劇的な光景に痛く感動して、目に涙を浮かべたのである。……』

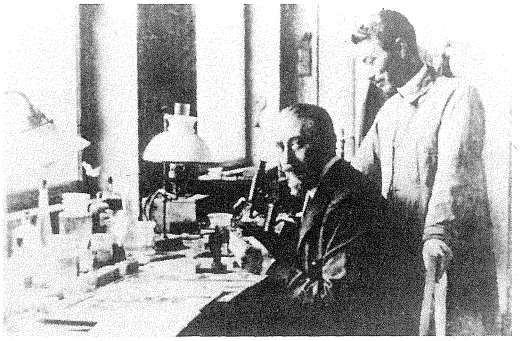
翌日の各新聞に、このことが大々的に報ぜられ、その後加藤のもとには「耳の治療も結構ですが、何とかして話すことができる子どもにしてほしい」との泣訴嘆願する親たちが相次いだ。仁侠果断の加藤は、「よし」と思えば直ちに実行に移す性格で、「我が子に一日も早く、お父さん、お母さんと呼ばせたい」との切実な訴えに安閑としておれず、ラジオ放送後、わずか一か月半という短時日に学園開設に踏み切ったのである。

小西薬剤学校を仮校舎とし、五月二日に口話法による授業開始という、奇跡的な超スピードの開校であった。当時ここが夜間校であったのが幸いして、昼間利用という便を与えられたのであるが、その日の入学生が一六名だったことも驚異であった。

プロフィール

加藤亨の家系は福井藩のご典医であったが、明治八年（一八七五）八月一四日、大阪市東区の地で出生した加藤も医学の道を志し、長じて東京帝国大学医学部に学び、耳鼻咽喉科を専攻、卒業後、大阪府立高等医学校で教鞭をとることになった。

やがてオーストリアのホーフラート・アー・クライドル博士の教えをこうべく同国に留学し、二年半研究に励んだが、加藤の手術に際しての手先の器用さには、老練の教授も驚嘆を禁じ得ず、また、教授に連れられてオランダのウトレヒト大学において、その天才的な実験を披露したところ、並いる専門の学者たちをして舌を巻かせたとのことである。



ウィーン大学留学中の加藤、左はクライドル教授（明治43年）

大正元年（一九一二）一〇月、留学を終えて帰朝し、研究の精華を発表するに及んで大きな反響を呼び、大正三年一二月には医学博士の学位を授与されたのである。

翌年一〇月高等医学校が大阪医科大学となり、教授の職に就いたが、数多くの研究の中でも、異色であったのは膜様迷路血管の実験で、従来だれもが試みなかった烏賊の墨汁を用いて微細な血管分布を明らかにし、化膿性中耳炎に対する新しい治療法を開発し、奇跡的とも言える好成績をあげたことである。

大正一四年八月、滋賀県八幡から加藤を訪ねてきた西川吉之助氏が、家庭で耳の不自由な娘の浜子さんにはなしことばの指導をし、常人との会話が可能になっていることを披露するに及んで、大いに感銘し、これがきっかけとなってJOBKからのラジオ放送、やがて大阪聾口話学校開設への道を歩んだのである。

大阪医科大学在職二一年、数々の業績を残して退官、東区伏見町に加藤病院を設立してその業務に精進するとともに、口話教育の研究と実践、それに加えて全国的な普及宣伝に全精力を注いだのであるが、それは決して平

坦な道ではなかった。

苦難の遍歴と新校舎の建設

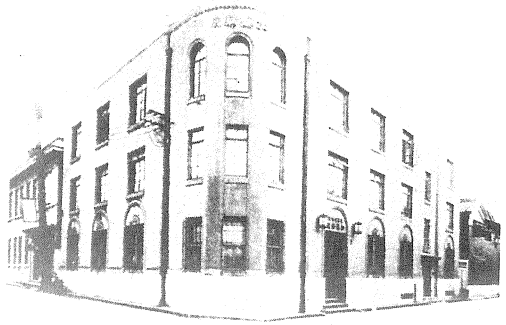
孤々の声をあげた小西薬剤学校での教育は、口話法の開拓の困難と喜びの交錯する中、突如として学校が使用不可能となり、わずか三か月で他への移転を余儀なくされた。

折よく夏休みの時期になっていたので、ほど近くの汎愛小学校の一部を借りて授業を継続した。加藤の趣旨であった「はなしことばに夏休みなし」で、その後も長い間夏休みをとらなかったので、児童・生徒も教師もつらい思いをしたのであるが、これによって口話教育が中断することなく、その成果をあげ得たのである。

夏休みが終わるころ、汎愛幼稚園の大広間に移ったが、やがてまた明渡しを迫られ、行き場所がないまま、一一月半ばに、この幼稚園の物置部屋使用という苦難に見舞われた。

暗い部屋に朝から電灯をつけ、三組の児童が三つどもえになって、背中合わせで授業を受けるとともに、職員室もなければ付き添いの親たちの休憩の場もないという環境であったが、「はなしことばを教えていただく殿堂である」との感で、だれひとり不平を訴える者がなかったと記されている。

ところが、ここもわずか二週間で退去ということになり、今度は北浜三丁目にあったローマ字会館の三階に引っ越したのである。床はリノリューム張りの美しい広間で、あたりは緑したたる中之島公園であった。やっと安住の場を得たかと思うと、五か月足らずで西区堀江北通りの愛国婦人会館に移転という悲運に見舞われたのである。



加藤聾研究所のあった加藤病院（大正15年５月）

「孟母三遷の教え」という古諺があるが、聴覚に障害のある子どもたちの教育の場が、他力によって次々と変わることになったのである。責任者である加藤の心痛はいかばかりであったか。だが、決断力に富む加藤が次々と教育の場を開拓し、一方、教師も母も子も移転慣れをして、この苦難に耐えつつ授業を継続したのである。

流転の中の口話教育には、西川浜子を指導して成果をあげた小幡芳子が担当し、優れた指導技術と熱意をもって当たったのであるが、わずかの間に教育の場を転々とすることは好ましいことでなかった。定住、新校舎の建設が焦眉の急となり、加藤校長の手腕と努力により、大阪府から土地の無償貸与を受けることができた。大阪市当局から小学校や幼稚園の解体古材の払下げを受け、東桃谷の地で、昭和三年（一九二八）五月一七日上棟式挙行、同年一〇月一一日落成式という運びに至った。

この落成式の前日、来校された勝田主計文部大臣が、口話教育の状況を視察され、はなしことばの上達ぶりにおほめのおことばをいただき、このことが夕刊各紙をにぎわして落成式に華を添えることができたのである。

加藤方式による口話教育とその成果

大正一五年五月にこの道の専門家である伊藤舜一を名古屋市の学校から迎えたのであるが、加藤校長は同先生に申し渡されたことについて、次のように記録されている。

『伊藤君、発音を教えることは暫く手をゆるめるよう、もの言うだけでは駄目だ。言葉の意味を解らせることが大切だ。君を煩らわすからには言葉の意味を先ず教えてほしい』と読話の先進性と重要性を述べ、『読話をするに当たっては、相手の話を正確に、しかも迅速に読み取るように、しかも何度も繰り返さないで、一度でしっかりキャッチするように一発主義を案出せよ』と付け加えたというが、この道の専門家である伊藤をして感銘させたのである。

これが大阪聾口話学校の教育の基本となり、研究に研究を重ねて「能動学習」を提唱するに至って天下を風靡したのである。

次に特筆すべきは残聴利用の指導である。外国製の優秀な聴力測定器によって検査した結果、児童・生徒のほとんどがなんらかの形で聴力を残していることが判明し、補聴器を活用することによって、はなしことばの明瞭化や、音楽リズムの習得に大きな効果をあげたのである。

放送局JOBKにて（後列右端が加藤、昭和６年11月）

外国製の補聴器は高性能ではあったが、あまりにも高価であった。加藤校長は多額の私財を投じ、音響関係の専門家向後義枝技師を助手として、一年半にわたる涙ぐましい苦心と努力の結果優秀な国産補聴器の製作に成功したのである。価格も外国製の七分の一程度であったので大いに活用され、このことが聴話教育または聴能訓練の名で全国的に波及したのである。

もうひとつの先見的試みは幼児教育の実施で、いち早く三歳児からの教育を始め、全国で行われていた耳の不自由な子どもの教育に大きな影響を与えたことである。

昭和八年四月一日苦労の末建てられた学校も大阪府に移管された。同一一年一二月一九日動脈瘤破裂により六二歳でその生涯を終えた。が、加藤亨のその偉業は今日まで光り輝いている。

【参考文献】
『春秋八年』『春秋十五年』
『加藤亨君伝』『あゆみ』各号

（元大阪府立生野聾学校長　北野藤治郎）

(注)　平成元年一〇月号（七八頁）で紹介しています。

郷土に生きる教育家群像㊼ 兵庫県

いのちの教育の探究者

東井義雄

八鹿町立八鹿小学校長のころの東井義雄

東井義雄は、地域に根ざし、作文教育を柱にして、いのちの教育を探究し続けた地道な教育実践家である。『村を育てる学力』など一〇〇冊を超える著書を通して、全国の教師にどれほど勇気や感動を与えたか、はかり知れない。こうした教育実践が高く評価され、文部省教育功労賞をはじめ数々の賞を受賞している。

貧しかった少年時代

東井義雄は、明治四五年、兵庫県の北部合橋村佐々木（現在の出石郡但東町）の東光寺の長男として生まれた。「私の寺を見たらきっと日本にもこんな貧弱な寺があったのかと驚くに違いない。」と書いているとおり、檀家も一〇軒程度しかなかった。

東井が小学校一年生の五月に、母は亡くなっている。また、その後の二〇年間に、家族の葬儀を六つも出している。

――「毎朝、御仏飯専用の小さな鍋で、御飯を炊き、お供えをする。そのお米の磨ぎ水の中に、大根を米粒ぐらいの大きさに刻んで入れ、そのうえにパラパラとお米をふりかけ、小量の塩で味付けしたチョボイチ御飯というのが常食であった」。

このような少年時代の貧しさが、その後の東井の人生に大きな影響を与えたことは当然

である。

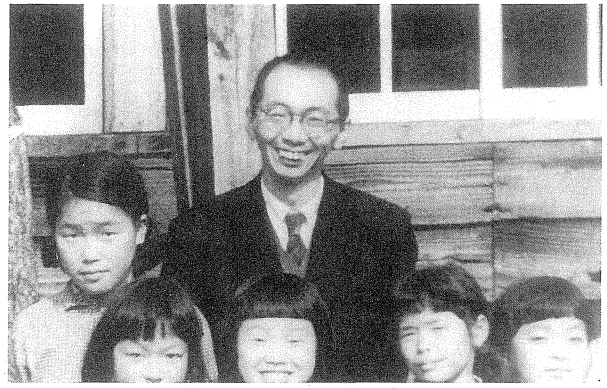
――「小学校五年のとき、小さな学校であったこともあり、奥田正校長先生に担任してもらうことになった。このときから、この貧しさから脱出するためには、とにかく勉強しないと駄目だと考えるようになった」。

そして、中学校に進学する決意を固め、うどん箱を机がわりにして、通信教育で中学校講義録を勉強している。しかし、三日三晩、父の枕元に座り込んで、ようやく許された受験であったが、合格しても進学しないという条件付きであった。だから試験に合格したが、父との約束を守って進学を断念する。

昭和二年、勉学の夢をすてきれず、お金がかからない師範学校に奨学金をもらって進学することになる。師範学校に入学し、全員何かの運動部に入部しなければならなかったが人並みはずれて不器用な東井を入部させてくれる運動部は一つもなかった。

――「ようやく入部できた競走部では、いつもビリッコを走っていた。このとき、よし、教員になったら、ビリッコの子どもの心が分かってやれる教員になろうと決心した」と述懐している。

昭和七年春、東井は師範学校を卒業して、豊岡市立豊岡尋常小学校に訓導として赴任する。満州事変が起きた次の年で、日本は不況



『村を育てる学力』の実践の場となった合橋村立相田小学校のころ

のど真ん中にあったころである。その上、家庭は病気、葬儀、それに父まで床にふせるありさまであった。

このころから、彼は生活綴方教育に情熱を傾けていく。一方、弁当を持ってくることができないので、水を飲んで昼食をすませる子供を幾人も見る中で、プロレタリア文学に引かれ、三木清、戸坂潤、大森義太郎といった人々の書物を読みあさった。

――「当時の日記を見ると、坊主、偽坊主、汝は飯を盗むか、糞坊主、というような自嘲的なことばが、いたるところに書き付けてある。」と述べている。

遍歴の果てに悟ったもの

戦争がいよいよ激しさを増す中で、思想統制が日に日に強化され、あちこちで進歩的教師が検挙されるようになり、東井自身も「私は警察の者だが……」という人から尋問を受けるようになった。

そのころ、高等科の担任をしていた。三学期末、理科の学習が全部終わって「これで予定されていた学習はすべて終わった。何か平素から不審に思っているようなことでもあったら質問してくれ」と言った。そのとき、北村彰夫という生徒が「先生、ぼくらがああんと口を開けると喉のおくにベロンと下がったぶさいくなものが見えますが、あれはいった

いどんな働きをしているのですか」と尋ねた。東井は困った。即答できなかったのである。その晩、必死で調べてその働きを知った。そのときの衝撃をこう書いている。

――「私は驚いた。ベロンとぶら下がっている口蓋垂の役割が分かったとき天地がひっくり返るほどのショックを受けた。口蓋垂のこと一つ分かっていないくせに「唯物論」だとか「無神論」だとか、偉そうなことを言い、傍若無人に生きている私、その私のために、食物が通るたびに働きづめに働いていたのがこれだったのか。それだけではない。肺も心臓も昼夜無休で働き続けている。担任していた子どものおかげで、目覚めることができた。私の第二の誕生になった」と。

昭和一五年に、父が死亡し、その臨終に会ってから、午前四時起床、全身の冷水摩擦、勤行という毎日を送ることを決意している。

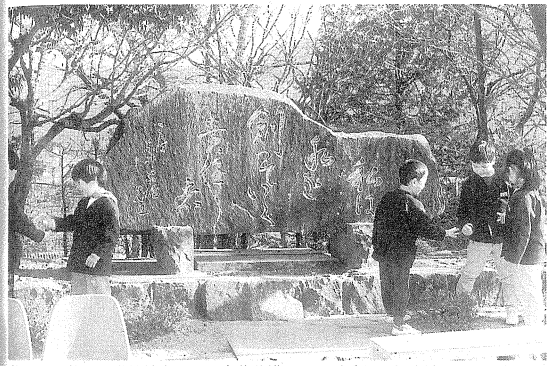
昭和一九年、合橋村立唐川国民学校に勤務し、東井の最初の著書『学童の臣民感覚』を出版した。かつての東井を知っている人には想像できない著書であったが、このことについて「東井義雄は、このような深い宗教的内省にいたるまでに、いわゆる転向を体験している。しかし、その転向は、マルクス主義から右翼超国家主義といった直線的なものではない」と菅原稔氏（兵庫教育大学助教授）は述べている。

当時の彼は、自宅から学校まで片道約六㎞の道をリュックを背負い、本を読みながら徒歩通勤している。

話題作『村を育てる学力』を出版

昭和二二年、同村立相田小学校（当時児童数約一〇〇名、後に統合により廃校）に転勤し、ここに一四年間勤務することになる。いよいよ東井の書くことを中心にした「ほんものの教育」の探究が始まった。

昭和三二年に出版し、教育界に大きな反響をよんだ『村を育てる学力』はここでの実践的教育論をまとめたものである。その後、『学力を伸ばす論理』をはじめ、矢継ぎ早に多くの著書を出し、昭和三四年に「ペスタロッチ賞」を、三五年には「小砂丘忠義賞」を受賞している。



養父町立養父小学校校庭にある東井義雄のことば、"私は私を創っていく責任者" 東井はこのことばをよく子供に送っている

東井は、なぜか小学校に勤務したかったようである。但東町立高橋中学校長を三年間勤めた後、昭和三九年から八鹿町立八鹿小学校（当時児童数約七〇〇名）に転勤し、「教科の論理、生活の論理」を追究する実践活動を展開することになる。

――「私は朝、出勤すると、玄関に掛けてあるワーズワースの詩の一節『子どもこそは大人の父ぞ』を読みます。校長室に入ると高村光太郎の書『いくらまわされても針は天極をさす』を読んで、今日もいろいろなことがあろうが、天の極まるところだけは見失わないように生きようと自分に言い聞かせる」と、多くの著書の中で書いている。東井のこれまでの振幅の大きなあゆみを見れば、これらの言葉を大切にしたのもうなづける。

東井はこの八鹿小学校長時代に、『学力観の探究と授業の創造』、『通知簿の改造』などを出版しているが、今年度から、小学校から順次実施されている「新学習指導要領」に述べられている学力観や「指導要録」の評価の観点は、

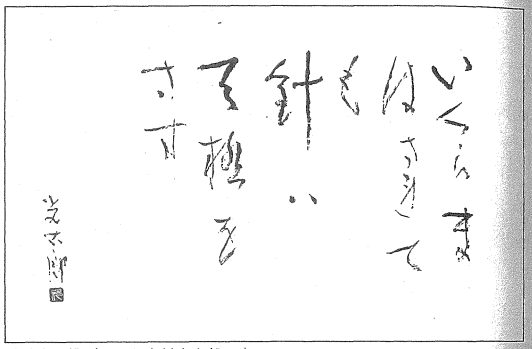
これらの著書が、今から二〇年も前に、既に述べていた内容と同じである。

東井にとって、八鹿小学校での八年間が、彼の教師生活の中で、教育者として最も充実した時期であったという人が多い。

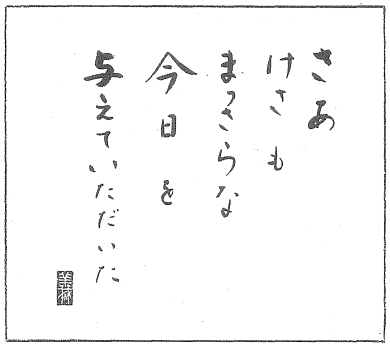
昭和四七年三月、東井は四〇年間の教師生活に終止符を打ち、後に兵庫教育大学大学院や姫路学院女子短期大学の非常勤講師として勤務するかたわら、全国各地から講演の依頼をうけ東奔西走している。その講演記録は『根を養えば樹は自から育つ』などとなって出版されている。そして、晩年になるにつれて講演内容が次第に宗教色をおびてくる。『拝まない者も拝まれている』などは、その代表作であろう。平成二年、NHKの「心の時代」に出演し、『仏の声を聞く』と題して講演し大きな反響をよんだ。

東井義雄記念館の建設

東井は平成三年四月一八日、七九歳の生涯を閉じた。但東町教育委員会は東井義雄遺徳顕彰会を設けて、いま東井義雄記念館の建設と記念碑の建立計画に着手しており、但東町役場の新築と並行して、役場の敷地の中心部に、平成六年に完成する予定である。このための協力者は、現在、北海道から沖縄まで実に二二〇〇人を超えている。



校長室に掲げていた高村光太郎の書



退職時の東井義雄の書

私は、この拙稿をまとめるに当たって、再び東井の自宅、東光寺を訪れた。かつては茅葺きの貧弱な寺であったが、今は東井の手で新築されて立派な寺になっている。

東井の書斎はもとより、本堂にも所狭しと本が並んでいる。蔵書数は何万冊あるであろうか。私が驚いたのは、蔵書数がすごいことよりも東井の読書の幅の広さであった。教育や宗教に関する書物よりも、むしろそれ以外の書物のほうが多いことである。東井の教育哲学を支えた基盤の大きさを知らされた思いがした。そして、東井記念館にはこの書斎をそのままの姿で遷してほしい気持ちになった。

東光寺は山腹の高台にある。来客が帰るとき東井は必ず庭先に出て、姿が見えなくなるまで、いつまでも大きく手を振って見送るのが常であったが、そこにはもう東井の姿を見ることはできなかった。

私が高校の教頭であったころ、尊敬していた東井義雄先生を招いて、生徒に講演をしていただいたことがあった。その二日後に、先生の著書が送られてきて、その中に手紙がしたためてあり、「……あなたの学校は本当の但馬文教府だという思いがしました……」と書いてあった。いま、その文教府に勤務し、先生について書く光栄に浴することになろうとは、そう思いながら寺をあとにした。

（兵庫県立但馬文教府長　足立勝美）

郷土に生きる教育家群像⑲奈良県

至誠・篤学・高潔の教育者

浦武助

一、生いたち

浦武助は、明治一五年一一月八日奈良県十津川村出谷に生まれた。明治二五年四月出谷尋常小学校卒業、郷校文武館を受験、合格したが、入学年限に達せず入学不許可、翌年も尚年齢不足であったが、自費生として入学を許可された。

文武館では修業年限五年を成績優秀のため、四年で卒業、尚向学の念やみがたく、上京、開成中学に編入学、卒業後早稲田大学高師部国漢科に入り、明治四二年に卒業した。

修学中の小学三年のとき、県から「平素志行端正」につき表彰され、開成中では明治三二年、三四年、それぞれ「学業及操行優等につき賞状を授与され、早稲田大学においては明治四〇年七月、特待生を命ぜられた。

二、教壇に立つ

大学卒業の年一一月、長崎県立中学猶興館（現県立猶興館高校）教諭、大正二年六月、山口県立岩国中学校（現県立岩国高校）を経て、大正三年三月、郷里の私立中学文武館（現十津川高校）の教壇に立つこととなった。

三、郷校文武館

浦武助の母校であり、郷校と称せられた文武館とはいかなる学校であったろうか。

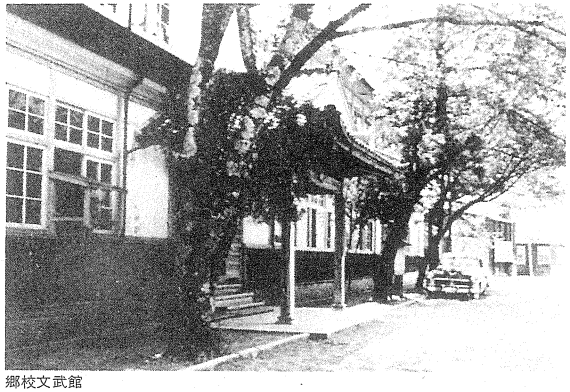
校史によればその創立は古く百二十有余年をさかのぼる。すなわち幕末動乱のこの時期、十津川郷士は京都にあって御所の警衛（維新まで五年間続く）に当たる等、勤皇運動に挺身していたが、諸国の志士と交わる中で学問の重要性、文武修業の必要性を痛感、朝廷側に学校設立を内願、やがて文武館取り立ての勅許を得、元治元年五月、孝明天皇の儒官中沼了三が十津川入りをし、折立松雲寺において開館式を挙げたという、まれにみる由緒と、長い歴史を有する学校である。

四、文武館中興の祖

請われて郷校文武館に職を奉ずることとなった浦は文字どおり至誠一貫、情熱をもって子弟の教育、また広く村の教育に当たった。

浦武助は博学、特に漢籍に精通し、春秋左氏伝を好み、十八史略、日本外史はことごとくこれを暗記していたという。

また、己を律すること厳しく、寒中自ら竹刀をとって生徒とともに寒稽古に励む等、古武士的風格を備え、常に言行一致、率先躬行された。



郷校文武館

この文武館在職中特筆すべき事件が発生した。大正一〇年三月館長事務取扱となった直後の四月、校舎の大半焼失という災禍に見舞われたことである。

校舎焼失後、当時の経済不況も反映して休館または廃館、再建存続をめぐって論議が高まり、村議会は紛糾を続け、果ては一時村長不在、県から職務管掌者が派遣されるという事態ともなった。この間、浦は率先して移転改築存続の論を唱え、村当局・議員等に嘆願、あるいは関東郷友会に働きかける等、再興に熱情を傾けた。かかる中で再建の望みの生じぬまま、いたずらに時の流れゆくのを深く憂慮した文武館生（四・五年生）がついに大正一四年九月、決起して連名の血判嘆願書を作成、雨中をおして村当局に陳情に及んだ。

このとき、浦はその心情を父兄会の席上次のように述べている。

「（前略）……彼等ノ行動ハ心アルモノヲシテ感激セシム、彼等ノ心臓ニハ慥ニ地下先人ノ血沸キ、彼等ノ涙ニハ地下先人ノ涙ガ宿ルヲ思ハザルヲ得ザラシム、此ノ如キ熱情アル少年ヲ見テ実ニ歓喜ニ堪ヘズ。（中略）……予不肖本館館長事務取扱ノ職ヲ辱ウシ何等能クスルナキヲ恥ズ。然リト雖之ヲ先人ニ聞ク人ノ

食ヲ食ムモノハ人ノ事ニ死スト、人生意気ニ感ズ、功名何ゾ論ゼン、已ニ此ニ禄ヲ食ム十余年、今又少年ノ此意気ニ励マサル、若シ死シテナホ本館ニ利アラシメバ将タ辞スベカラザルノ立場ニアリ。秦先生教ヘテ曰ク事ニ当リテ至誠、期死、活動ハ成功ノ三要素ナリト、願ハクバ諸賢ノ御助ヲ得期死此事ニ従事セン事ヲ思フ。（後略）」

数年間に及んだ存廃の論議もようやく存続に決定、昭和二年財団法人となり移転校舎改築となったが、死を賭して事に処した浦と、血判嘆願に及んだ母校愛に燃えた至純の生徒がいなかったならば、文武館の存在、ひいては今日の十津川高校はあり得なかったと言うのも過言ではないだろう。

浦武助が文武館中興の祖と称せられるゆえんもここに存するのである。

浦はこの後、財政難の中で困難な学校運営に文字どおり粉骨し、文武館在職二十有五年、有為の人材を世におくり、文武館をして県下特異な学校として、浦自身は異色の校長としてその名を知られた。

五、母校開成へ

昭和一四年文武館長を辞した浦武助は、昭和一七年、母校開成中学の教頭として招かれた。ちなみに校長は開成同窓の東季彦（十津川出身、法学博士、後の日大学長）であった。

開成は、明治四年の創立にかかり昭和二六年創立八〇周年時の記録によれば大臣を出すこと二〇名、文化勲章受章者一〇名と各界に錚々たる人材をおくり出している。

運動会で力走する浦氏（中央）

浦は昭和一九年東校長の後をうけ校長となり、戦中、戦後の有史以来の動乱時に学校経営に当たった。

浦は当時のことを次のように述懐している。

「（前略）……予は終始学校内に寝泊りしたが、その部屋も焼け、応接室に畳を敷いて新住居とした。（中略）……此空襲の渦中にありて生徒も半数に減り、職員も大分疎開した。しかし予は生徒が一人でも残る限りは踏み止まる決心をし、……（後略）」

また、当時の職員の一人は思い出の中で、「（前略）……動員の生徒と工場に泊りこんで率先勤労にあたられたのも、まだ火焔の立ちのぼる焼跡に戦災死した生徒を求められたのも、全く先生の生徒愛、母校愛の発露だったと思う。そしてこの先生の信念的な大愛によって開成なる存在が、あの多難な戦時を無事に乗り切れたのだと思う。（後略）」と述べている。

また、ある一人は「（前略）……再建の基礎が確立し、やっと平和な日々を迎えられるようになったのに、突然、浦校長は職を辞され、郷里に帰られた。何故でしょう。先生は開成の為に献身努力し苦労の限りを尽くしたのです。軌道に乗った開成を見て、自己の職責を果たし得た喜びを感じ、後事を後継者に託し得て心暖まる家族のもとに帰られたのです。

「功あり名を残す」のではなく「功ありて名を残さず」の葉隠武士浦武助先生の出所進退と思います。（後略）」と語っている。

六、故山に帰りて

四年余の開成を辞して帰郷した浦は、玉置神社、護国神社の宮司、また、村史編纂の業に携わることとなった。「十津川遍路」と称して戦前に次ぐ二回目の戦没者慰霊のため、村内くまなく行脚したのもこの時期である。

浦武助は昭和三四年四月二五日、七六歳を一期としてその高潔の生涯を閉じた。

浦は終始どこにあっても漂々として質素、辺幅を飾らず、名利を求めず、自信と信念に生きたのである。

くしくも日本有数の古い歴史を有する文武館、開成を母校とし、しかも両校の館長、校長として校運の隆替をかけた時機に際会し、命を賭けて学校を守り、今日あるを得さしめた浦武助の功、正に大と言わねばなるまい。

七、胸像建つ

昭和六〇年四月三〇日、奈良県立十津川高校玄関前に浦の徳を慕い、その功績を後世に残すべく、教え子や村民によって胸像が建立された。

開成中学校

この師にしてこの挙あり、けだし「宣なり」というべきであろう。

背誌を記して稿をおく。

背誌

浦武助先生は十津川村大字出谷に生を享け明治三十五年東京開成中学校を卒業　早稲田大学に進み国語　漢文学を修め　大学を卒業するや教育界に入り　大正三年四月請われて十津川中学文武館の教諭となる　以来昭和十四年四月まで二十五年間　文武館の教育は勿論　十津川村教育に情熱を燃やされたり

文武館長を退引されるや招かれて母校開成中学校長を勤む

先生の説くところ知徳を磨き　質実剛健にして国家社会に貢献するにあり　言行一致の薫陶は生徒はもとより　村民をして深く感銘せしむ殊に大正十年四月文武館の火災に際しこれが再建に　日夜尽瘁せられたる労苦は筆舌に絶し　先生の遺された功績は枚挙に暇なく　村民斉しく敬仰するところなり

茲に先生の高徳を追慕し　その功績を称え永く後世に伝えんとしてこの胸像を建立するものなり

昭和六十年三月吉日

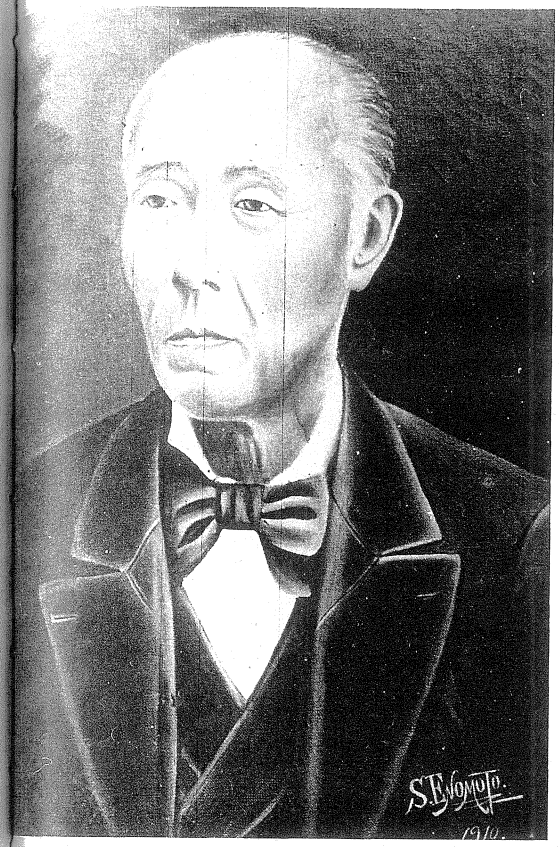
発起人代表　十津川村長　中嶋時峯撰

【参考資料】
『浦武助先生の面影』『開成百十』『文武館百年史』
（十津川村教育長　勝山　毅）

郷土に生きる教育家群像⑫和歌山県

名作「稲むらの火」とともに人間愛・郷土愛に燃えて

浜口梧陵



一、名作「稲むらの火」

『「これは、たゞ事ではない。」
とつぶやきながら、五兵衛は家から出て来た。……』

年輩の読者の皆さんには、その記憶も新たによみがえってくるかと思います。戦中使用の文部省尋常科用小学国語読本巻十「稲むらの火」の冒頭の一節である。戦時体制下、数ある教科書教材の中で、これほどまでも、当時の子どもの心をとらえてはなさなかった五兵衛の崇高な人間愛・郷土愛は今も鮮明に脳裏にやきついているのではなかろうか。

ところが、この物語についての由来や、また五兵衛のそれ以上のことについて知る人は、案外少ないようである。

紀州・広村、現在の和歌山県有田郡広川町広がその舞台であり、主人公・五兵衛はこの地の郷土の偉人、浜口梧陵翁である。

とりわけ、梧陵の歩んだ生き方は常に郷土の充実、国家の発展であった、その心は「稲むらの火」で代表され、その具体化は後に紹介する史跡「広村堤防」ではなかろうか。ここにその生涯の一端を紙幅のゆるすかぎりたどってみたい。

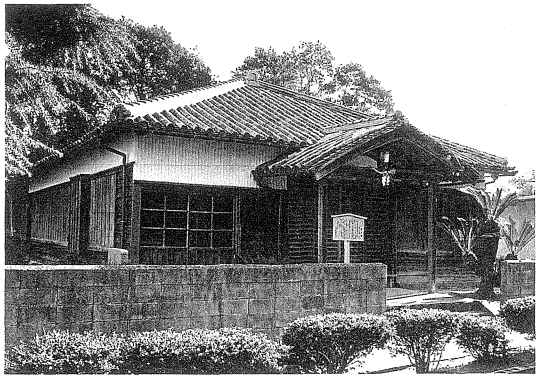
二、厳格なる家庭教育

梧陵は文成三年（一八二〇）広村に生まれ、二歳のとき父を失い、母の手で養育された。一二歳のとき浜口本家の養子となり、七代目浜口儀兵衛を襲名、後に梧陵と号した。

浜口家は、代々この村の豪族として知られ、千葉県銚子で醤油を醸造し、今日も尚その名声を高めている。

浜口家の家憲は、たとえ主人でも、少年時代の安逸は許されず進んで困難に耐える気風を培い、更に人を率いる道を修めるために、梧陵も代々の例に従って奉行人と寝食を共にし、礼儀をわきまえ精励刻苦家業に専念した。特に梧陵の少年時代の薫陶に祖父の果たした存在が大きかったことを見逃すことはできない。

一二歳のときから郷里広村を離れ、家業見習いのため、江戸を経て銚子への旅立ちは、年若い梧陵にとって何より得がたい広い世界への実体験でもあった。同時にふるさとを遠くにして、はじめて郷土広村のよさや存在を発見したことが後々郷土づくりの土壌になっているものと考えられる。


浜口梧陵翁の創設した「耐久社」

三、よき師友との出会い

梧陵は二〇歳のとき、文武両道に修業を重ねていたが、幸い終生の師友となる人を得た。蘭学者三宅良斉で、西洋の事情について学ぶところが実に多かった。また佐久間象山や勝海舟等の先覚者について学び、兵学及び砲術を研究した。勤王家の菊地海荘とも交わって、一層尊王攘夷と開国との得失を考究した。特に勝海舟とは最も親密な仲で、そのことを物語る海舟の碑文が、今も郷土広村八幡神社に残されている。

四、国づくりは人づくり

幕末の世上は、まさに内憂外患、幕府は国論を統一し国是を確立することができなかった。梧陵は勤王家でもありまた開国論者でもあった。時代の推移を冷静に見つめながら、国家の前途を担うべき人材の育成こそ、現代最も肝要と考え、広村崇義団を組織し、青年子弟の覚悟と発奮を促した。

また郷里の子弟の教育の必要性を痛感し、武道の稽古場を開設、その長き存続と発展を願って「耐久社」と名付け、文武両道の充実

を図っていった。この私塾はその後幾多の変遷を経ながらも、代々梧陵の建学の精神は現耐久高校並びに耐久中学校へと引き継がれ、一三八年の歴史・伝統を積み重ねている。

五、渡航への夢破る

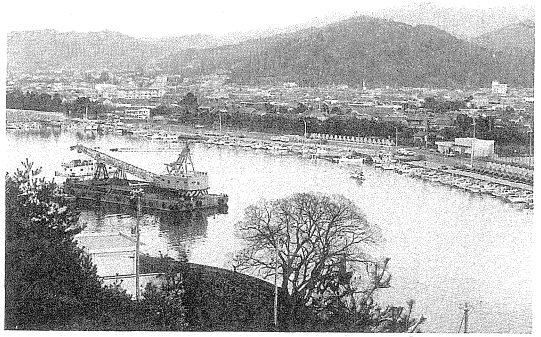
梧陵は子弟の教育のみならず、自らも世界に目を開き、西洋文明の長を取り入れ、我が国の短を補い、新文化を進める必要を痛感していた。特に欧米諸国への海外渡航について幕府にその許可を得ようと願い出たが、当時は吉田松陰の処刑の時代で幕府も認めるはずもなかった。

六、大津波来襲

広村は和歌山県の海岸線広湾をかかえ、その外洋は紀伊水道へと広がっている。風光明媚な景勝地として人々にも親しまれているが、太古より地震による津波で甚大な被害を受けている。安政元年（一八五四）一二月二四日、いわゆる安政南海地震による大津波が発生、夕闇迫る広湾を直撃、広村は最大波高八mの激流で壊滅的な打撃を受けた。

この津波に直面した梧陵は、身を挺して村人の救済にあたり、闇夜にさまよう村人のために松明をたき稲むらに火をつけて避難の道しるべとした。これによって八幡神社へ無事避難できた村人も少なくなかった。

一夜にして変転した広村の惨状は正に目をおおわんばかり、梧陵の活躍はむしろこれからで、被災者の飢餓を救わんための米の借り入れに東奔西走し、自らも米の醵出をしながら、数日間、一四〇〇人の飢えをしのいだ。


広港湾とその後方に見える史跡広村堤防

家財の整理・管理、道路の復旧作業をはじめ、私財を投じて家屋五〇軒を建て、極貧者に無料で居住させるなど数々の献身的活動が続いた毎日であった。

七、私財を投じての大堤防建設

家屋、家財や田畑を流失等した村人は働く気力を失い、ある者は村を背に離村する者も少なくなかった。このため広村永遠の安全を確立しようと、血族一体となって藩の許可を得て、安政二年（一八五五）大堤防建設に着手した。この工事は、村人に職を与え、離村を防ぎ、労賃を日払いにして怠惰をなくすなど、梧陵の非凡な行政的手腕が発揮された。約四か年の歳月をもって、全長六〇〇m余、高さ五m、根幅二〇m、天幅二m、人夫延人員五万六七三六人、その費用銀貨九四貫三四匁（約一億円近いと言われている）すべて梧陵の私財でまかなった大事業であった。

八、生ける神

津波来襲に対する梧陵の犠牲的献身的な活動と、物心両面にわたる恩恵について、村人たちだれもが知らないはずがなかった。その

ため浜口大明神を建て、その徳を讃えようと計画したが、これを聞いた梧陵は「私は神にも仏にもなりたいなどと少しも思っていない……」と辞退した。このため神社建立は中止されたが、村人の心の中には常に大明神として崇拝しない者はなかった。

ところがこの美談を文豪小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が耳にし、和歌山県広村での梧陵の活躍をもとに「生ける神」（Living-God）として、彼独特の文体で短編を書き欧米に紹介した。その内容は事実と多少の違いもあるが、梧陵の村人を助けた崇高なる人間性は、本質的に何ら変わることがない。

こうして梧陵の生き神様的人間像は国の内外において、広く紹介され深く感銘を与えたのである。

九、不朽の名作

昭和九年、文部省は第四期国定教科書の制作に当たり、国語と修身の教材を全国に公募した。このころ、小泉八雲の「生ける神」の英文に感銘していた一青年教師　中井常蔵氏（現在八二歳）は、五兵衛の心を子どもの心に植えつけたいと願って「生ける神」を中心にして子ども向け教材に書き改めて応募し、見事入選したのがこの「稲むらの火」である。

爾来、この名作は昭和一二年から一〇年間、国定教科書に採用されたが、戦後教科書の再編によりこの教材は姿を消した。

和歌山県県庁内（東列）に建立されている浜口梧陵翁銅像

ところで、最近、秋田沖地震（昭和五八年）による津波で、犠牲者一〇〇人中児童一三人の幼い命を失った。「もしあの教材で教えていたならば……」という声が全国から上ってきた。こうしてこの作品は今再び防災教育の立場から、活用を望む声が高まっている。

（なお昭和六二年「防災の日」に稲むらの火の作者中井常蔵氏が、防災功績者として、国土庁から大臣表彰を受けられた）

十、各界での活躍

梧陵の果たした功績は地方ばかりでなく、中央における活躍も列挙していけば枚挙にいとまがない。

明治四年、大久保利通の推薦で駅逓頭（郵政大臣）をはじめ、和歌山県大参事や初代県会議長として、中央・地方の指導者として活躍した。

十一、初志を貫ぬく

老いてますます盛んな梧陵は、常に知識を世界に求めて止まなかった。明治一七年一切の公職を退き、六五歳の高齢ながら青年時代からの宿願を果たすべく欧米視察に旅立った。

サンフランシスコを経てニューヨークに滞在、各地を視察している間に病にたおれ、医師をはじめ身近な人の看護も空しく、ついに明治一八年四月二一日、数々の業績を残して享年六六歳の生涯を閉じた。

（有田郡広川町立耐久中学校長　清水　勲）